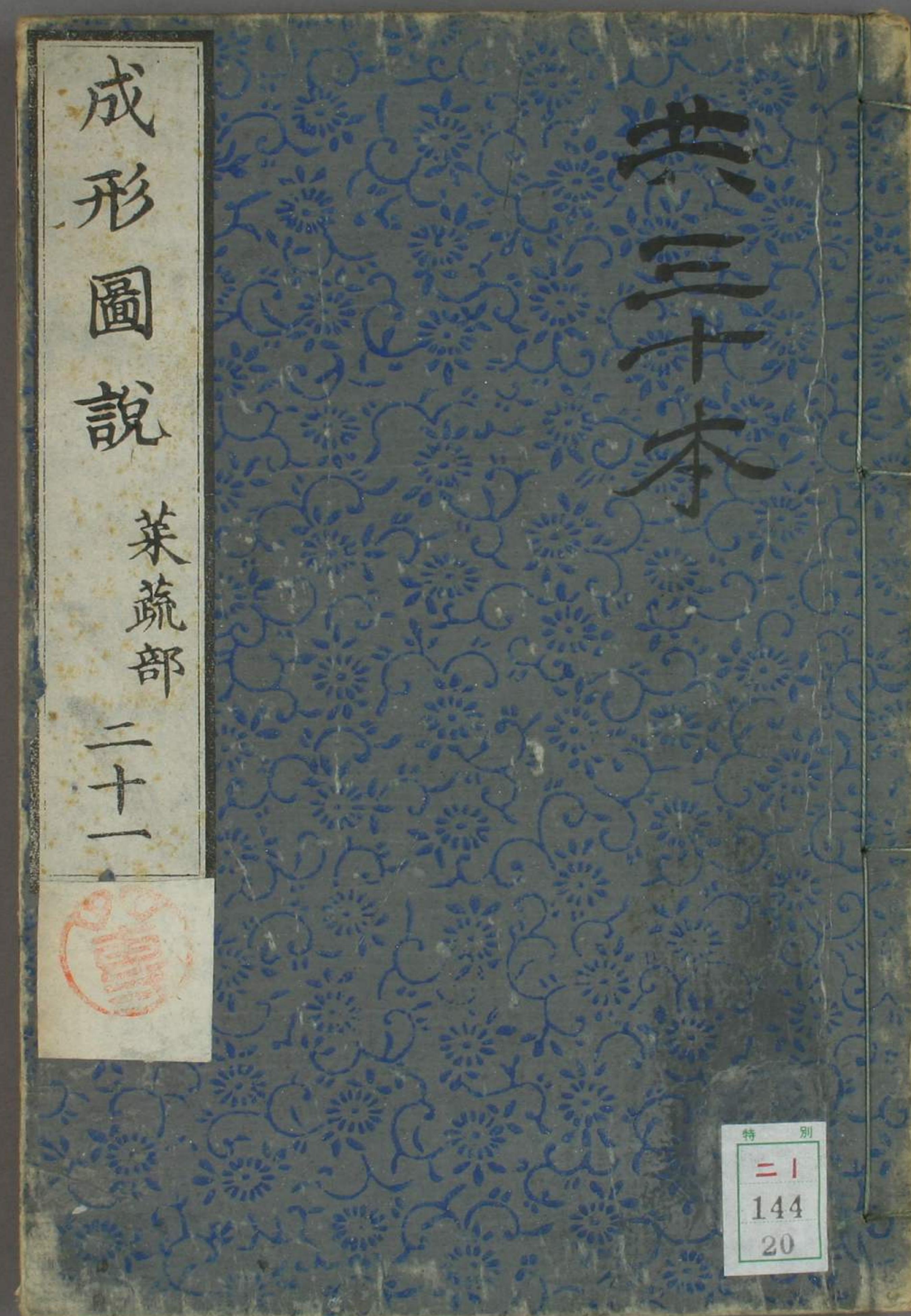


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



成形圖說卷之二十一

目錄

松
菜
菔
蕪
菩



加一
144
卷之二十一

成形圖說卷之二十一

菜部類

菜此又は奈と云凡嘗と通ふ詞より飯より物を統く奈と云也俗云飯の菜ハ枕冊子ニ添てあるの訛みて謂おめくり也今ハおまくりとて云因魚とも奈といひ又美て真菜と称ハ菜より織きると云今おねがれ松城奈にはハ菜中のいちどもたとへりあり猶いかヘ獸とはち猪鹿と食せばなへての肉とば志と訓が本也し又蔬と書紀久佐比良と云ハ叶の義あり葉と比良ミツヒ葉手のさと式又俗叶盤み食と草葉汁かど今もアリモアリ和名鈔云ば

菜蔬の字と連て久左比良とし、菌と亦の訓もハ菌亦菜
となりたり轉るゝのぞ又菜とは直ニ葉と云ふハ祝詞
式、又奥津藻葉邊津藻菜と云ふ如し今之俗ハ泛く野
菜と称せ、ニトニ式ニ謂大野原ニ生物者甘菜辛菜など
又山野能物波甘菜辛菜など哉らと云りて野生の物が
らで、也輦轂の地小居ていへば菜蔬の類郊野み化きる
もの也忽むしゝ人ハ野乃某菜野の某蔬と称へし雅語
の後くハ折りて己が古宅み化きる園菜と野菜と呼
ふの通称となりふきそもく又斯書ハ當用を主とせら
ぐゆゑ園菜と以く首頁みづやり一通子う食物知新

云素問五穀為養、五菜為充所以輔佐穀氣疏通壅滯也、凡
菜蔬本所生平原野移之栽於田圃或摘采於山野或採於
河海以備于膳食也、蓋菜蔬可食者名萩，予謂近世益珍饈
奇饌異肴多矣，由之今也王公大人尤賤藜藿而特貴殊珍
之芼，羹難得之肴，且怙富而委口腹於厨吏，包丁多不辨
菜茹之主治可不可而已，醫家亦不明食性而無由教戒病
人，云々凡菜蔬之類田圃ニ培る者ハ素ぢり小く河へき
きの也いへど其性柔弱て毒物として山野ニおほ
ばくすまうもの、ハ性良かくて旨味専れハ剝し固
て糞入るから山野のものとらしくして食料が不培養

ものとらしと寸凡山望み生る者ハ氣と養し川澤み生
る者ハ水道既清し渓流み生る者ハ渕と通次蓋地產み
うりて肥瘦別稟のおあるまゝ自然なり

七種新菜

正月七日新菜の羹スシと油フあと味ミもじくは跡シテ生モキ種
と拂ヒり今又園菜と雜用ミツヨウいきて其中ミツコトて來る所史トシシ子チ聞シ者
玉蓋エトヒ本年ボシの新蔬菜スシタケ羹スシと二所大神宮トシタケへ奉玉トシタケ御饌殿モクジンデンと
供ソムあと延曆エンゲル二十三年撰ツクシむ所の大神宮儀式帳イシヨウチヤウと載
られしきバ舊カルき時代ドリの例ドリにて奥津オツ津ツ年の田穀タノモハ去マサニ咸
の秋カクみ成マサニきるゆゑ忌歲マサニ内ミナミ初ハタチ祓ハラハラ巴ハラハラ皇スカ神スカと奉モリら

るうちの新菜蔬スシタケハ之シテ是之シテ年の初春ハタチと生出ハタチあとされハ
是と新年ハタチ地初植ハタチの時ハタチしも羹スシ化ハタチし翁シロて又皇神スカと奉
うせよ此乃ハタチ先王報サキツミシカ本モトニタケの盛意オホニヨロなりとらし既ハタチ年ハタチの
不一詳ハタチ述ハタチるがごとくもくあと年の年立ハタチより來ハタチ
来ハタチ也胡ハタチうり小ねりハタチく人ハタチとやわらかハタチて時ハタチべよ出ハタチくべき
かきハタチかき色ハタチくよみ葉搗ハタチると立ハタチ翁シロつまほハタチいふ一ハタチへ乃
歌ハタチどり歎ハタチくんそく古ハタチ集ハタチ仁和ハタチの帝ハタチ比賣ハタチ乃ハタチたは
しましけり時ハタチ人ハタチと新菜スシタケうびよみてあれより君ハタチはふ
アサハタチとそのしよちく波ハタチだへ今ハタチもうれし因ハタチよ在ハタチる
がぶとちゆのや若菜ハタチハ野原ハタチと川ハタチよらうり新集ハタチ

鎌倉ち波累^{カカ}ニ葉摘残兒^{カドウシクハリ}又川上^{アシ}ノ流^{アシ}
品菜の流^{アシ}來^{アシ}しととんく皆^{アシ}品菜^{アシ}は初^{ハタハ}品菜^{アシ}の流^{アシ}
名^{アシ}少^{アシ}ぞりし若^{アシ}うは國^{アシ}語^{アシ}子稚^{アシ}とも弱^{アシ}とも春^{アシ}と^{アシ}計^{アシ}
也^{アシ}そ正月七日^{アシ}の葉羹^{アシ}と七種^{アシ}と^{アシ}ふことは正月十五
日^{アシ}七種^{アシ}北^{アシ}御^{アシ}食^{アシ}り出し名^{アシ}少^{アシ}てや^{アシ}河^{アシ}ノ^{アシ}延喜^{アシ}
主水式^{アシ}曰正月十五日供御^{アシ}七種^{アシ}粥^{アシ}料^{アシ}中宮^{アシ}米^{アシ}一斗五升粟^{アシ}
黍^{アシ}子^{アシ}稗^{アシ}子^{アシ}莧^{アシ}子^{アシ}胡^{アシ}麻^{アシ}子^{アシ}小豆^{アシ}各五升鹽四升^{アシ}と云^{アシ}此^{アシ}莧^{アシ}子^{アシ}
鈔^{アシ}引^{アシ}本朝^{アシ}式^{アシ}和^{アシ}名^{アシ}美^{アシ}乃^{アシ}出處^{アシ}未^{アシ}詳^{アシ}と^{アシ}今^{アシ}按^{アシ}よ^{アシ}莧^{アシ}爾^{アシ}雅^{アシ}作^{アシ}名^{アシ}
皇^{アシ}本^{アシ}艸^{アシ}艸^{アシ}救^{アシ}荒^{アシ}野^{アシ}譜^{アシ}齒^{アシ}生^{アシ}水^{アシ}田^{アシ}中^{アシ}苗^{アシ}似^{アシ}小^{アシ}麦^{アシ}而^{アシ}小^{アシ}四^{アシ}月^{アシ}
熟^{アシ}可^{アシ}以^{アシ}作^{アシ}飯^{アシ}充^{アシ}飢^{アシ}と^{アシ}河^{アシ}少^{アシ}て多^{アシ}識^{アシ}編^{アシ}美^{アシ}乃^{アシ}古^{アシ}米^{アシ}と^{アシ}乃^{アシ}え^{アシ}し
之^{アシ}の^{アシ}あり又^{アシ}拾^{アシ}芥^{アシ}鈔^{アシ}曰^{アシ}七^{アシ}種^{アシ}粥^{アシ}ハ^{アシ}米^{アシ}小豆^{アシ}大角豆^{アシ}黍^{アシ}粟^{アシ}莧^{アシ}子^{アシ}
蕷^{アシ}或^{アシ}曰^{アシ}白^{アシ}穀^{アシ}大^{アシ}豆^{アシ}小^{アシ}豆^{アシ}栗^{アシ}粟^{アシ}柿^{アシ}莧^{アシ}子^{アシ}
注^{アシ}ふ^{アシ}莧^{アシ}子^{アシ}と^{アシ}大^{アシ}角^{アシ}豆^{アシ}小^{アシ}豆^{アシ}栗^{アシ}粟^{アシ}柿^{アシ}莧^{アシ}子^{アシ}書^{アシ}紀^{アシ}
天武天皇十

年正月七日召親王諸王於内安殿使諸臣侍外安殿置酒
賜樂^{アシ}といひそ七日^{アシ}の節會^{アシ}の始^{アシ}て貞觀儀式^{アシ}の宣命^{アシ}曰
今日波^{アシ}正月七日乃^{アシ}豐樂聞食須^{アシ}日尔在故是以御酒食閉
惠良岐常毛見留青岐馬見遍止^{アシ}と^{アシ}りて七種^{アシ}の羹^{アシ}事^{アシ}
事^{アシ}記^{アシ}しを^{アシ}但正月子日地若菜比事ハ本朝文粹
み載^{アシ}に管贈大相國早春觀賜宴官人應製の序に聖主命
小臣分類舊史次見有上月子日賜葉羹之宴臣伏惟自觴
王公於正朝至喚文士於内宴首尾二十餘日洽歡言志者
諸不及婦人此唯丈夫而已畧况亦野中^{アシ}蓬萊世事推之惠
心爐下和羹俗人屬之萬指宜哉我君特分斯宴獨樂宮人

矣と仰り所謂子日比若菜アシノハシアツテ七種ナナシキトソス事ハアリ
す子日の宴ハ類聚國史 平城天皇大同三年タツノミツニ勅テレテ凡
え 嵐峨 傳和アマガモアリテ又文德實錄ムニテシラクム天安元年正
月賜アマガシ曲宴カクイ昔者上月之中必有此事時謂之子日燕也今日
之宴アマガシ修舊迹アラタニタチ也 延長御記アラタニノミコトノメモ云采女アマガ調和若菜アシノハシ羹アシ供進アマガシ給侍臣
嵐中烷置中盤アマガシ云々是ヒ子日の宴アマガシアシテ後くアハ寛和元
年 圓融上皇遊紫野アマガシ折小松立沙上設宴アマガシ謂之子日遊是
等上月子日の宴とハやれど七日の七種ナナシキアマガシハ己
のやあ師光卿アマガシ年中行事資隆アマガシ筆中鈔アシノハシアドモル尼アマガシアマガシ
きはアマガシ不審アマガシアヤ 大宗家訓アマガシ筆内傳アシノハシの書アシノハシアマガシ

の若菜七种の粥アシノハシアドモル後人の化アマガシアセシ娘說あり
因て前か言へソダガおと七種アマガシ七種の御粥アシノハシアマガシ
出アマガシハ水アマガシアマガシアリ又重明親王記アマガシム天暦四年
二月廿九日女御安子朝臣奉若菜アシノハシアマガシアリアマガシアマガシ
と奉るあと正月七日アマガシアリアマガシアマガシアリアマガシアマガシ
類要雜アマガシアマガシ七種若菜アシノハシアマガシ供御アマガシアマガシ十五日粥アシノハシアマガシと次第し御盤七枚青
瓷佐良七口アマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシ
の胡アマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシ
みセ日アマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシアマガシ
正月上子日勅アマガシ内藏寮内膳司獻若菜アシノハシアマガシ其後或十二種或七

種とも多多く今の薦アシタの御ミサニハ水無ミズナシ御家ミツバチより献アヒル
努アツメひく松マツと薪カシ三ミ城シテからき又櫛司スミ供アヒル御所ミツバチよりすム七
種シキの御ミサニ粥ヌシハシテの粥ヌシて薪カシを少シ加メてシテ事アリ事アリ七
人ヒト人ヒトありシテ本朝ホンノシタ食鑑シキジク曰ハ本邦ホンボウ正月セイガツ七日セブン嘗シテ七種シキ菜ナ粥ヌシ
今東國ホントウコクの佐賀サガ百首ヒツシ薦アシタ御ミサニ有アリぞシテかシテ古アラニ
舊シテせりつシテみシテやシテ七シキの魚ウオんシテの魚ウオんシテの魚ウオ七
種シキうはシテよシテ西土シエトの書シテは不
能シテ食シテ粥ヌシ之シテ以シテ菜ナ可シ也シテふシテどシテ人ヒトえシテ勞シテアリハシテあれシテ皇コト
國コトハ穀蔬豐穰ヨウヤウの中土コトみシテとシテあシテ巴異バヨウやシテうの贋コト艸ナ
んどシテからシテれりシテ入シテあシテんシテとシテハシテおシテれシテとシテ已シテをシテ

理シテありシテ固シテ今の一シテ書シテ此シテ記シテどシテばシテ兵ヒーローへシテもシテしくシテたシテよシテ引シテぬ
○源氏談善成卿ホウジヤウ河海鈔カヘシ七シキ種シキ菜ナハ薪カシ鑿カシ薑カシ布カシ形酒カシ
酒カシ代佛カシ之座カシと云シテ是シテ年シテ中シテ沙事カシ拾カシ芥カシ鈔カシ公事カシ根カシ漁カシ等カシの記シテ
並シテ又シテ同シテ枕カシ艸ナにシテ七シキ日シテ若カシ菜ナとシテ人の六シキ日シテよりシテあり
さ取シテ友シテしおシテどシテすシテにシテ元シテもシテのシテ艸ナばシテ子シテどシテめシテとシテゑ
よシテばシテ何シテよシテ量シテとシテ云シテとシテいシテつシテどシテとシテいシテをシテいシテさシテかシテ
えシテれシテきシテん合シテてシテ耳シテせシテ艸ナとシテよシテもシテのシテひシテばシテ宣
すシテりシテりシテすシテぬシテ頃シテすシテハシテあシテ若カシえシテとシテよシテもシテのシテひシテばシテ宣
の生シテくろシテばシテよシテてシテ耳シテせシテめシテどシテ猪シテうシテなシテ菜ナとシテつシテれシテか
れシテあシテまシテしシテうシテばシテきシテをシテあシテじシテわシテりシテ今の按シテみシテうシテはシテ正シテ月シテ七シキ日シテにシテ明シテ日シテかシテじシテ

七日正月七日の御菜おひなを、、めぐらすと人ひとに比ひて時ときめりの
御ごはあ病病邪氣えきと
除くよしみ御ごあり 又曰 正月十日正月十日の御ご四日よは夜よ御ごはし
所ところの御ごはあもももも七くさ比ひ御ごうもものも今日きのう御ごで
ごんまでひくのひくのゆゆふて調しらべじかかてをとばとばし
計けい肺はい息きをさせ玉たまへるへる事こと 豊とよ御ご食く炊く屋や姫ひめ推古すいこの御ご
代しろよりくる事こと ふて京外きょうがい七野しちのとて七所しちしょ比ひ御ごそくそく一いつくさ
い、城しろからからなづかなづかく登のらのすやうす
ころ佛ぶつの神かみ川かわなく、こちととややねねのの川かわが、
水みず井いてくくハ松まつの莖くきあり今按いん康富記こうふ曰文安
五年正月六日正月六日自山城綴喜郡じさんじょう大住だいじゅ献けん七種しちしゅ菜などどてて七
箇ご地じ野の處しょみ取とりととふ事こと曰李詮りのの外ほかはんはんふふ

七日正月七日の御菜おひなを、、めぐらすと人ひとに比ひて時ときめりの
御ごはあ病病邪氣えきと
除くよしみ御ごあり 又曰 正月十日正月十日の御ご四日よは夜よ御ごはし
所ところの御ごはあもももも七くさ比ひ御ごうもものも今日きのう御ごで
ごんまでひくのひくのゆゆふて調しらべじかかてをとばとばし
計けい肺はい息きをさせ玉たまへるへる事こと 豊とよ御ご食く炊く屋や姫ひめ推古すいこの御ご
代しろよりくる事こと ふて京外きょうがい七野しちのとて七所しちしょ比ひ御ごそくそく一いつくさ
い、城しろからからなづかなづかく登のらのすやうす
ころ佛ぶつの神かみ川かわなく、こちととややねねのの川かわが、
水みず井いてくくハ松まつの莖くきあり今按いん康富記こうふ曰文安
五年正月六日正月六日自山城綴喜郡じさんじょう大住だいじゅ献けん七種しちしゅ菜などどてて七
箇ご地じ野の處しょみ取とりととふ事こと曰李詮りのの外ほかはんはんふふ

し蓋

推古帝の御諱ハウヒ豊御食律姫ナシモヤセシニ

治就^{ヨリ}ムテ在昔穀種^{ヒカリ}を貴みシヘテ上の尊號^{トヨ}ムキバ

新蔬菜臺^{カシタ}と大神宮へ奉らせシ儀式ナシムゆゑあ
スベクミオモチレル○蓋蓑鈔曰芥荀五^{ハシ}行田平子佛
ノ座^{ハシ}シ以耳^{ハシ}此れや七種^{ハシ}注^{シムシカハ}大根^{ハシ}又て又
曰^{シムシカハ}此^{ハシ}こそ^{ハシ}ムノ^{ハシ}也^{ハシ}即^{ハシ}シ^{ハシ}此^{ハシ}
や七くさ○増補題林集^{ハシ}セリナハ^{ハシ}即^{ハシ}シ^{ハシ}此^{ハシ}佛
の座^{ハシ}シ^{ハシ}此^{ハシ}一説^{ハシ}の次^{ハシ}芳荀^{ハシ}拂^{ハシ}紫^{ハシ}幕^{ハシ}耳^{ハシ}奈^{ハシ}草
繪^{ハシ}葉^{ハシ}絵^{ハシ}白^{ハシ}是^{ハシ}七種^{ハシ}○鳥^{ハシ}逐^{ハシ}五日^{ハシ}七種^{ハシ}コ^{ハシ}
ア^{ハシ}摘^{ハシ}葉^{ハシ}ハ^{ハシ}何^{ハシ}黃^{ハシ}蒿^{ハシ}田^{ハシ}の仲^{ハシ}シ^{ハシ}此^{ハシ}二^{ハシ}ベ^{ハシ}喜^{ハシ}田^{ハシ}ハ^{ハシ}

づあうや^{ハシ}亂わうかと川^{ハシ}あつ^{ハシ}まよらうて福地^{ハシ}
きひく^{ハシ}唐ね^{ハシ}載^{ハシ}高麗包^{ハシ}丁日本^{ハシ}の^{ハシ}りと^{ハシ}土^{ハシ}比^{ハシ}
ア^{ハシ}と^{ハシ}と^{ハシ}ぬ^{ハシ}さ^{ハシ}よ^{ハシ}て^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}い^{ハシ}も^{ハシ}注^{シムシカハ}は難^{ハシ}の曉^{ハシ}
鳥^{ハシ}宿^{ハシ}ふ^{ハシ}る^{ハシ}まで^{ハシ}渡^{ハシ}る^{ハシ}ものあれバ其^{ハシ}と^{ハシ}度^{ハシ}く^{ハシ}い^{ハシ}るん^{ハシ}と^{ハシ}
て^{ハシ}自^{ハシ}本^{ハシ}比^{ハシ}を^{ハシ}唐^{ハシ}の^{ハシ}鳥^{ハシ}立^{ハシ}り^{ハシ}ぬ^{ハシ}さ^{ハシ}た^{ハシ}と^{ハシ}く^{ハシ}赤^{ハシ}深^{ハシ}海^{ハシ}門^{ハシ}集^{ハシ}
み^{ハシ}ひ^{ハシ}あ^{ハシ}つ^{ハシ}り^{ハシ}立^{ハシ}り^{ハシ}ぬ^{ハシ}さ^{ハシ}た^{ハシ}と^{ハシ}く^{ハシ}赤^{ハシ}深^{ハシ}海^{ハシ}門^{ハシ}集^{ハシ}
く^{ハシ}ふ^{ハシ}成^{ハシ}ぬ^{ハシ}と^{ハシ}ぶ^{ハシ}る^{ハシ}よ^{ハシ}し^{ハシ}そ^{ハシ}ん^{ハシ}されど今^{ハシ}の^{ハシ}刊^{ハシ}本^{ハシ}み^{ハシ}
し^{ハシ}是^{ハシ}今^{ハシ}立^{ハシ}る^{ハシ}の^{ハシ}夜^{ハシ}生^{ハシ}免^{ハシ}板^{ハシ}嵩^{ハシ}わ^{ハシ}る^{ハシ}ち^{ハシ}薪^{ハシ}あ^{ハシ}ど^{ハシ}ば^{ハシ}あ^{ハシ}べ
約^{ハシ}子^{ハシ}ば^{ハシ}う^{ハシ}包^{ハシ}丁^{ハシ}比^{ハシ}背^{ハシ}す^{ハシ}て^{ハシ}抱^{ハシ}子^{ハシ}を^{ハシ}う^{ハシ}り^{ハシ}川^{ハシ}こ^{ハシ}あ^{ハシ}る^{ハシ}
と^{ハシ}せ^{ハシ}乃^{ハシ}俗^{ハシ}事^{ハシ}也^{ハシ}又^{ハシ}本^{ハシ}藩^{ハシ}藏^{ハシ}幕^{ハシ}府^{ハシ}の^{ハシ}故^{ハシ}宴^{ハシ}と^{ハシ}侍^{ハシ}へ^{ハシ}し^{ハシ}司^{ハシ}存^{ハシ}の
戸^{ハシ}あり^{ハシ}永^{ハシ}正^{ハシ}月^{ハシ}七^{ハシ}日^{ハシ}七^{ハシ}種^{ハシ}の^{ハシ}菜^{ハシ}臺^{ハシ}と^{ハシ}調^{ハシ}逐^{ハシ}に^{ハシ}芳^{ハシ}荀^{ハシ}拂^{ハシ}形^田
平^{ハシ}子^{ハシ}佛^{ハシ}禪^{ハシ}繪^{ハシ}葉^{ハシ}絵^{ハシ}白^{ハシ}の^{ハシ}七^{ハシ}種^{ハシ}今^{ハシ}擣^{ハシ}み^{ハシ}寛^{ハシ}延^{ハシ}年^{ハシ}中^{ハシ}二^{ハシ}條^{ハシ}右

也ハ漬物の名あるべしと云つて捕ふ須受ハ濯已通ひ
て其根の濁句と称ていひしきるが又菹醃の事少も
見しむるべし多通ひ須々中と云ふ通也多見
いへ豆娘^{モモ}は毛嫩苗とさせらるゝ事えられ
と雜菜^{モモ}と云ふ通也多見
し六日須受白は菜菔^{オホチ}あり亦潔白根の義あるべし
耳無^{ナガ}といへるハ覓の事あり此をの上云菜とし
又云葉も正の云證通ひ

大臣宗基公七種乃異同比較^ス訂^シされ始てモ定説を以テ
是而謂須受奈須受志昌等^{セリナガ}萬^{コキタク}形繁縝佛乃禮^{カナ}あり今京
師松尾社^{アリ}より献る七種即是あり捕ふ芥^{ワラカタ}蒼^{タマ}は云の知
る不あり^ト佛^{ゴキ}には氣^キ曲^{カク}あり巻^{カク}曲^{カク}一名ハ黃蒿^{オホタチ}也
而御形ハ黃蒿乃轉音と云ひ又此曲の製細大共み立矣
あり故云五行爻^{ヨモギ}と呼べる也そ一說云亦牛夢の事とも
繁縝^{ガバ}は亦その如る所あり^ト云佛形と牛夢音近^{カニ}也
佛の座^サは車前^ハあり一說云生^{カク}菜^{カク}あり年中^{カク}事^{カク}云川^{カク}菜^{カク}の事^{カク}云云
一說云芋^{サツ}脚^{カク}あり芋^{サツ}根^{カク}の子芋^{サツ}と云根^{カク}孫^{カク}云云
一方へ附る佛の蓮花^{カク}座^{カク}子象^{カク}ると云須受奈^{カナ}ハ即^{カク}薦^{カク}著^{カク}か
而須受^{カナ}とハ内膳式に蔓^{カク}根^{カク}須々保利^{カク}とありて須々保利

と式み冗えきを取引しとある回しとのを今耳はぐさ
と云ものあゝ貝原幸州ヨウジより耳菜未知漢名賤婦以為蔬而
食是尾菜比一種小一く葉はとすが多も枯れて春よく
蕪菜野艸あり○又源氏後若菜卷に海妙十二種ハ若菜
公事根源ヨウジセイ也若菜蓬芝蓬水葵ヨモギ水雲松タケノコあり弟良公
也又此野菜也若菜蓬芝蓬水葵水雲松也又之良公
乃既了此松の字此事白河天皇の御時而遠み御馬有
りレバ若松と書いてこのゆと讀也み母事ふく侍るゝと
申す松とそへとあるさてハいが事なりや上皇仰らき
侍りまさらハ和名鈔溫菘和名ハコハシ小大根等あり大根の
小根也又小根也野生野生野生又根子也木耳也類あるべし
今採み此十二種皆野生ふ係り營贈大相國上月子ノ日

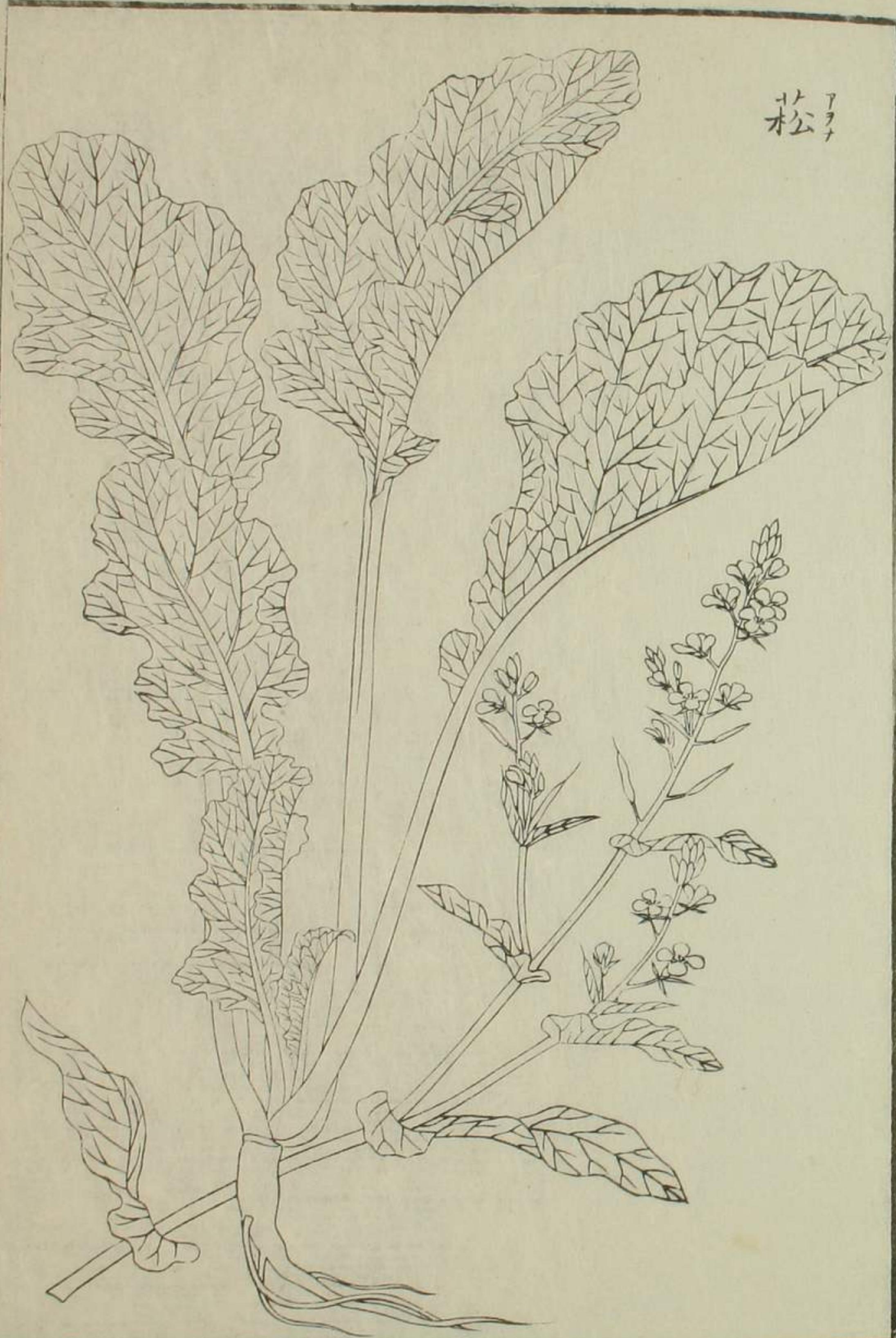
賜菜羹序弓野中笔菜ヨウジアヒリテ通證曰七種皆野生之菜
也蓋受了承あるべし後柏原天皇比大津歌りくもか
升め花よはゆうてとえいづるまほとそしる也乞比七
くさ食鑑曰今俗正月七日薺粥中入燒餅子而嘗之此擬
七種菜則迎新之意乎挿ハサウエ四民月令云立春日食生菜取
迎新之意又歲時記云舊以正且至老日諱食雞故歲首唯
食新菜ヨウジアヒリ西土もと正月七日も七種菜と食と
いふハ荆楚のとの俗事もや蓮生八幡云荆土人日採ハサウエ七
種菜作羹湯以食之と云えアヒリ自餘八菜也各候み藏別
いへ里公事根源ヨウジセイ也延喜十一年正月七日後院也

種の菴菜と供はる菴菜羹スミを食すしハ、無病なく年中比邪
氣と除く術ありと見え一以前に右文記等に載する所
ハ、醍醐天皇の御時例タマシキ正月人日ヒトヒ御粧ミツカク或調達せら
リ此粧ハ内侍ウチジ而アリ典タマシキ御後餅ミツカク以烹て来る事アリハ餅
ハ熟マトコトなるとて御食ミツカクを付スル御氣丹波ミツカクの典タマシキ菴寮スミより是
ニ若菜スミをかづく獻スル之ハは主上歎感タマシキにて末代まで此
若例タマシキとぞタマシキ小豆アズキの若菜スミと孫スミ御布ミツカク御流ミツカク御簾ミツカク貢
る地と定スルれ地と菴菜比里スミヒリと呼名スミ也アリ芥スミ
等タマシキ加へスル七種ナナシキの菴菜スミをなして庶人スミ生スル服食ミツカク
おとスルれ里アリと云スルらば子日ヒトヒの若菜スミと内侍ウチジの御

燒餅スミとハ別く子烹ヒトヒ調スルある。此燒餅子菴菜と雜スミへ供スル
とし供スルるもの御粧ミツカクとハ、あつまるふや粧ミツカクと式タマシキふハ七種ナナシキ粥
とあるふて舊フルハ粥スミあり。此後タマシキハ粧ミツカクとも雜炊スミともかく
ある實スミハ同スルふを至四季モタツ淡タマシキ。正月十四日松尾の神
云スミ七種ナナシキの蔓スミの残スルにみ今日の御粥ミツカク。此一ふすり
あせてタマシキ御粧ミツカクハ和名鈔スミみ餗スミと御米菜スミ搔スミ。此
の義スミといつり說文云スミ粧スミ以米スミ和羹スミ也。韓詩外傳タマシキ云孔子困
於陳蔡之間スミ。七日不食藜羹スミ不粧スミ禮記注スミ粧スミ米粉也。米二肉
一米スミ為スル主肉スミ為スル輔合スミ以為スル餌スミ。煎スミ之スル雜炊スミハ和名鈔スミみ餗飯スミ。加口スミ
自伎スミ加天スミ。訓スミて雜飯也スミ。注スル於夜慈スミハ御雜饗スミかるべ

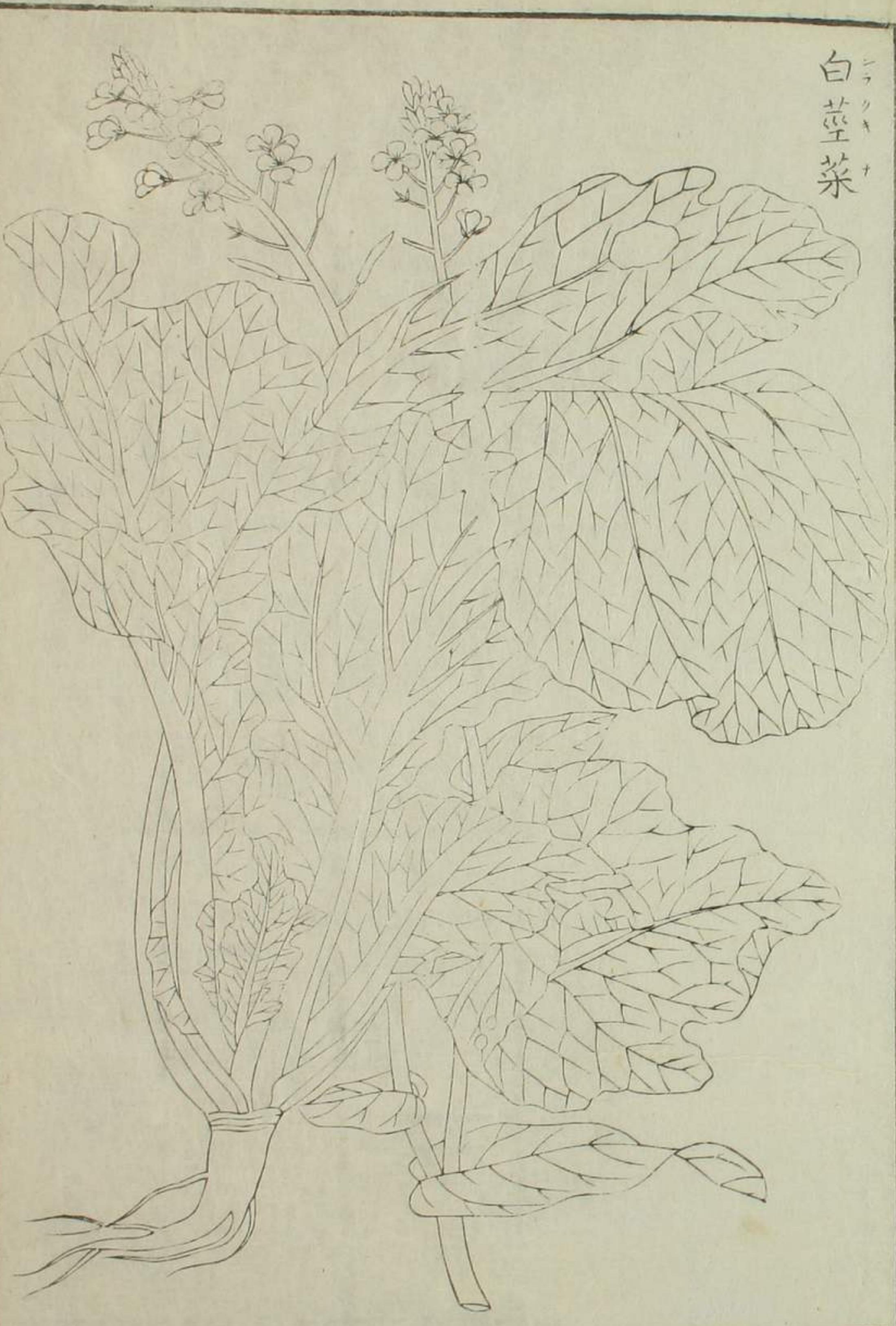
しジジアヘミシテヤ是雜炊也今の俗正月七日比雜煮
と調みみは七種菜と飯小丸へ味噌汁よりて煮調あり
凡人子南て七歳よりレバ男女ともみ就感及ヒ薄七所
の精と乞て之球吃リモモ雜煮必モ正月の祝い餅と糀
烹也凡雜煮ハ舊冬製し餡み牛房蘿蔔昆布薯蕷菘栗海
筍などお難て莧とし食ニ正月小限らど賓客賀慶の時
不也亦調ヘモ傳言にゴウモク飯ふどソハ西土人の
羅漢菜と称シが如し菜品雜糅と望つゝり又傳粉みて
入飯北陸みて煮熟するは三ソツカどいひ又上方みて
入日の物乃煙燭と福ワカシミをソ是は善菴の半城

安袁奈古事記○即菘菜あり菴集よハ昔菘と
故み順抄云蔓菁を安袁奈と云ふ根の大小あると俗に
川の故と本同書かて蔓菁の甘苦根の大きさあると云ふ
沙也近江菜と呼んで總菜で總菜云々即菘と云
高菜新撰字鏡菘を天王寺菜と云ふ他所云て是と云
和名引其所以是也朝食鑑曰洛
安袁奈と云ひ本朝食鑑曰洛
次み引其所以是也朝食鑑曰洛
菘載揚氏方言云他所云て是と云
大芥引蘇敬曰芥小芥云々即菘と云
不並名云々即菘と云
生み小芥云々即菘と云

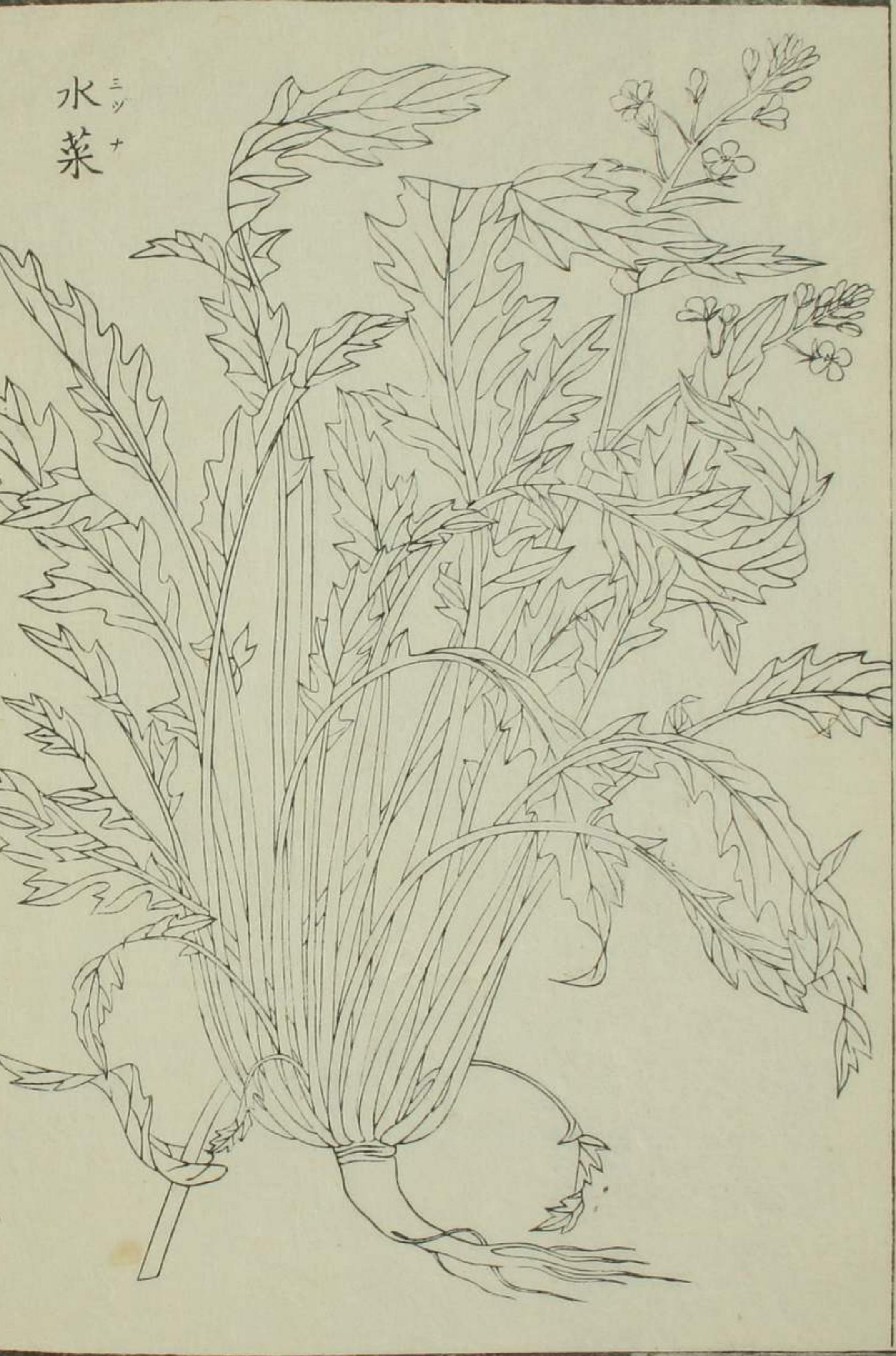


菘

北 土牛肚菘白菘冬繁百葉等々以て和名多加奈と云
古の時より多く加奈と云ひのハ即菘類少て芥菜の輩
あらむと訓蒙圖彙曰菘菜ハ葉高根小者也蓋莖立乃高
人呼て白菘也又仲縛み產る人呼て白菘似也
史和本引名艸音嵩字興或作菘云古謂菜為葵晋以
名艸○榻菜○救荒本引野史云古今之醫別錄○通雅
引經○本引野史云春以菘今謂之菜水菜又曰白菜
引經○本引野史云夏曰菘秋曰葵菜類の白菜と
注○本引野史云春以菘今謂之菜水菜又曰白菜
引經○本引野史云夏曰菘秋曰葵菜類の白菜と
安袁とハ天海青人艸とはじめ木艸おのづくら乃也相
安袁とハ天海青人艸とはじめ木艸おのづくら乃也相



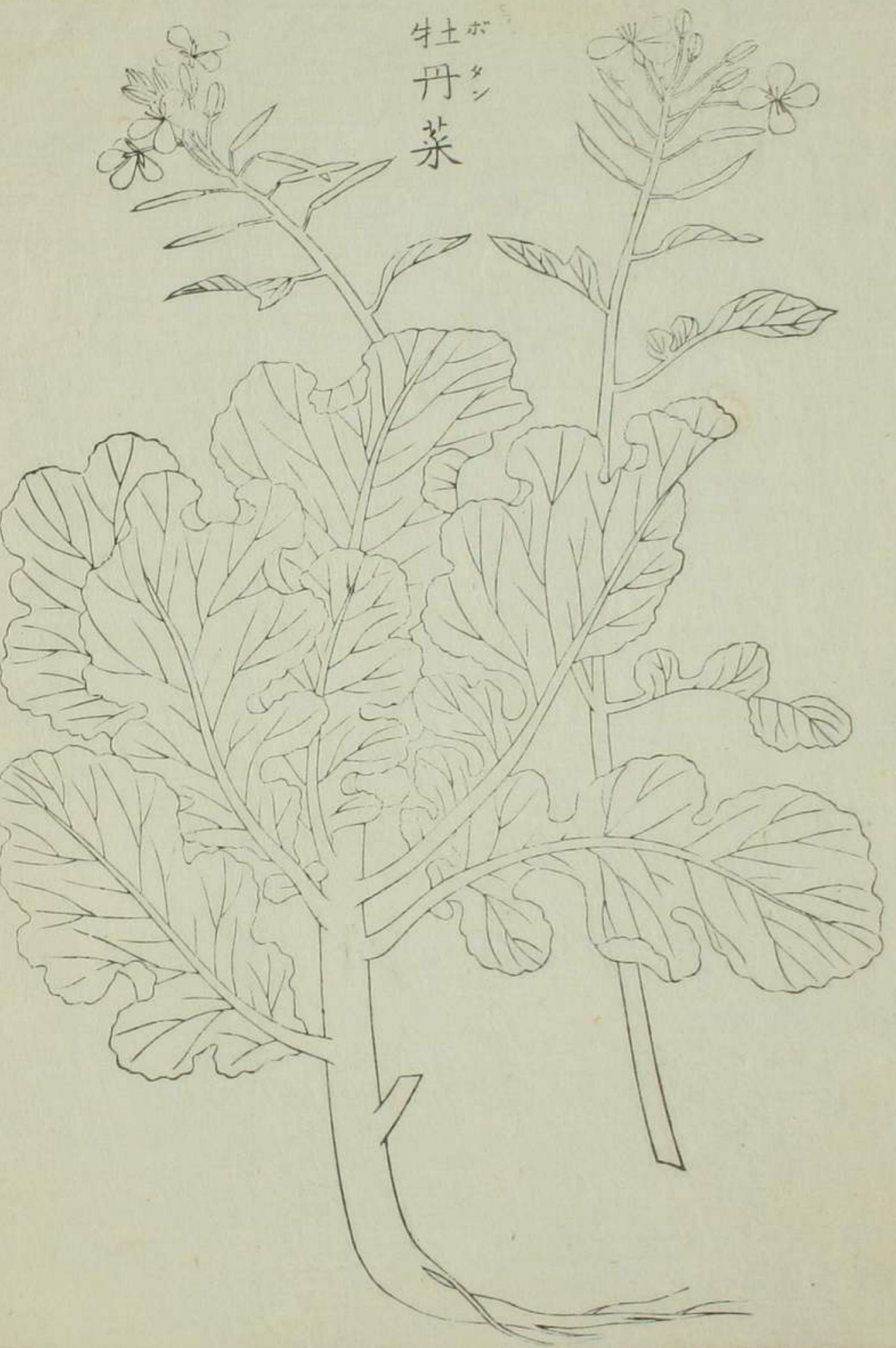
白莖菜



水菜

牡丹菜

牡丹菜



みて和漢共に少壯比称ちと書け事女房といひ青春青
年あど是也又安麻伎ハ天の氣比おのつうら人の命と
保ちぬる理あく式に甘菜と称へ生菜と書じ姓氏錄み
ハ青菜葉をりて又万葉の御みハ芥菜タ菜に摘り更
割茹ふとろし夏冬ともかぎりぞ四時に生立ちハ
此菘菜みどりれど凡ハ只菜とのいへば此との名
あふたと夷邦みち亦ち通雅云菘亦菜之總名云菘
有數種猶是一類止論其美與不美菜中最為常食さて和名鈔蔓菁を安袁奈と訓
るハ今の水菜の名と京師みてハ可美根ゆると南土
に移せば根さへ無さへ常の青菘と變れるゆり但鄙小

て京菜であるのハ即ち名菜の事みてモ種の玄蕃^{カニ}の事
江門近郊のはおの代^{トトロ}ウラシモレモ異邦^{アシキ}モカクモアリ
ノ蘇^ス菜^ナク既に菘^ブ菜^ブ不生^ス北土^ヒ北土^ヒ將^シ菘^ブ子^シ種^シ之^シ一年即
變^{ハシメル}爲^ス蕪^ブ菁^ブ誤^ス今^ナ南^ヒ北^ヒ竺^シ種^シ之^シされど津國^{ツクニ}蔓^ブ種^シ子^シと猶^シ南^ヒ
地^ヒへ撒^シるに一二月^ハの後ハ始^ミみ根^{ハシメ}らき蔓^ブ菁^ブに^{カニ}お及^シハ人
此^ハ知^ル所^シなり埤雅^{ヒイクヤ}云菘^ブ菜^ブ北^ヒ種^シ初年半^ハ為^ス蕪^ブ菁^ブ二年菘^ブ種^シ都
絕^シ蕪^ブ菁^ブ南^ヒ種^シ亦然^シ蓋^シ菘^ブ之^シ不^ス生^ス北土^ヒ猶^シ橘抽^シ之^シ變^ス於淮北矣
是^ハ是^シもみてハ天王^{アマテハ}も蔓^ブあると西州^{シシユ}も種^シてハ只^シの蔓^ブ菁^ブ
と化^シの類^シみて涼順^{リョウシン}ハ近轍^{シナツク}又生^スるものを観^スて蔓^ブ菁^ブと安^シ

袁奈^{アラナ}とせるハ高^{タカ}生^スり^ムると云他^ハ物^シ少^シて^{シテ}根^{ハシメ}のあき
が名義^{メイイ}み合^スぬふ^シ精^{エツ}を致^シし^ムんハ夏^ハ莢^カの水^シと疑^シや
いはゆ^シ○凡^タ妻^ハの初^ハ種^シと下^シ三月^ハに苗^キ生^スて二葉^カあ^ハ
と卵^ハ苦^ハ菜^カと云^ス卵^ハと書^シ紀^シみかひ^シと仰^スるハ芽^ハと通^ヘリ一
切^ハ子^ハ蛤^カ殻^カの解^ハきしに似^シシバセ^シせに甲^カ片^カの意^シど^モ、
二^ニ寸^{タメ}延^{タク}長^トとは掌^ハ菜^カと云^ス掌^ハの莢^カは頃^ハみ發^シ生^スルバセ^シ
ハ菜^ハの細^ハ縫^カあると子^ハ菜^カと称^フリ二^ニ言^ハ集^スて裏^ハ耳^ハハ苞^ハ
ぬ^シ仰^シけ^ムのめ^シが直^ハいの子^ハ菜^カ摘^ムぬ因^ハど^モか^シ○前^ハ
いへる京畿^{カニ}の名^ハ菜^カハ九條東寺^{カニ}の近^ハ郊^{カニ}み産^スると云^スセ
里^ハ一本^ハ生^ス根^{ハシメ}十莖^カと生^スし味淡^シ美^シか^シて澤^ハふし春^ハ月^カ

盛サカリりて宣東みて小松菜トコリハ取れ事下總國葛飾那
 小松川み化る者名高し莖アシにて微喜く味アマく更し今
 本所毎針戸より隅田川邊に皆化多り又本藩の向莖菜ミラキキ
 ハ莖扁ヒラタ大く葉白し味淡シテて雪霜と經し後ハ愈よろ
 し唐人嘗て此の味麒麟菜クニルキと曰布又本艸ミズニ二種ツウり
 と云ふハ此兩品比種あるべし○天主寺菜ハ浪義也
 里アシ名アシメふもの也同野菜ハ淡薄日射の良產也莖
 柔セヨ小一て根ふとく字シテ一歳内みて冬月その根とつ
 らぬ用ひ或ハ莖菜ミラキキを陰乾カヤシキかし收蔵し名て熟菜シラキと乾
 菜ミラキとす又醃鮑ミキふとさめぬると莖菜ミラキとえ京菜ミタツ殊ミタツみ

長く年を経しハ愈よろし近にみてつるると近江道ツヅ
 ひ風飴賞フジコロシへし延喜式ヨウキシ又菘蘿ブクツヅ三石料ミツシキ塩ソル
 ふ已不えて昔より用ひ有るアリ已不えて詳アリ考アリ之は漬物シロモノ又
 蒸米謂之饋餽シロモノ穀也疏スル之シテ果ハタチ名又木ハシキ名棗ハシキ属ハシキ雅ハシキ注ハシキ又
 言ハシキ即蒸ハシキ之シテ謂之饋餽シロモノ穀也疏スル之シテ故ハシキ穀ハシキ而熟ハシキ也蒸ハシキ之シテ故ハシキ言ハシキ饋餽シロモノ穀也均ハシキ之シテ又味ハシキ穀ハシキ之シテ故ハシキ稱升ハシキ也又殿牧令ハシキ穀ハシキ之シテ則稱升ハシキ也凡
 稲ハシキ令ハシキ穀ハシキ之シテ則稱升ハシキ也又殿牧令ハシキ穀ハシキ之シテ則稱升ハシキ也
 云あり遵ハシキ生八歲に醃鹽菜ミタツといひ本艸ミタツ用甕菜ミタツと云
 云あり遵ハシキ生八歲に醃鹽菜ミタツといひ本艸ミタツ用甕菜ミタツと云

又笄西み植入菜ゆり北陸み三月菜と呼び關東みて薺
葉とゆふ實ハ同種あり○晚菘ゆり葉の色深緑み光あ
リ味いども重れり通雅云秋末晚菘今之白菜也牛肚
菘葉最大又南京京口之菘為上曰箭筈白北京則取入窖
壅培不見風日長出黃葉嫩黃色脆美無滓謂之黃芽菜和
名鈔引崔禹錫食經溫菘味辛是人作黃菜常所噉者也董
菜俗云王佐以一去佐波夜介もあり今言拔菜みて多く
窖養ふせり知新謂牛肚菜ハ此より度聚菜と云小毒あり
可疵切る者甘艶と同食へば早く除らじ○紫菘八葉色
紫あり又牡丹菜或は和蘭菜と云わり根は地上に抽

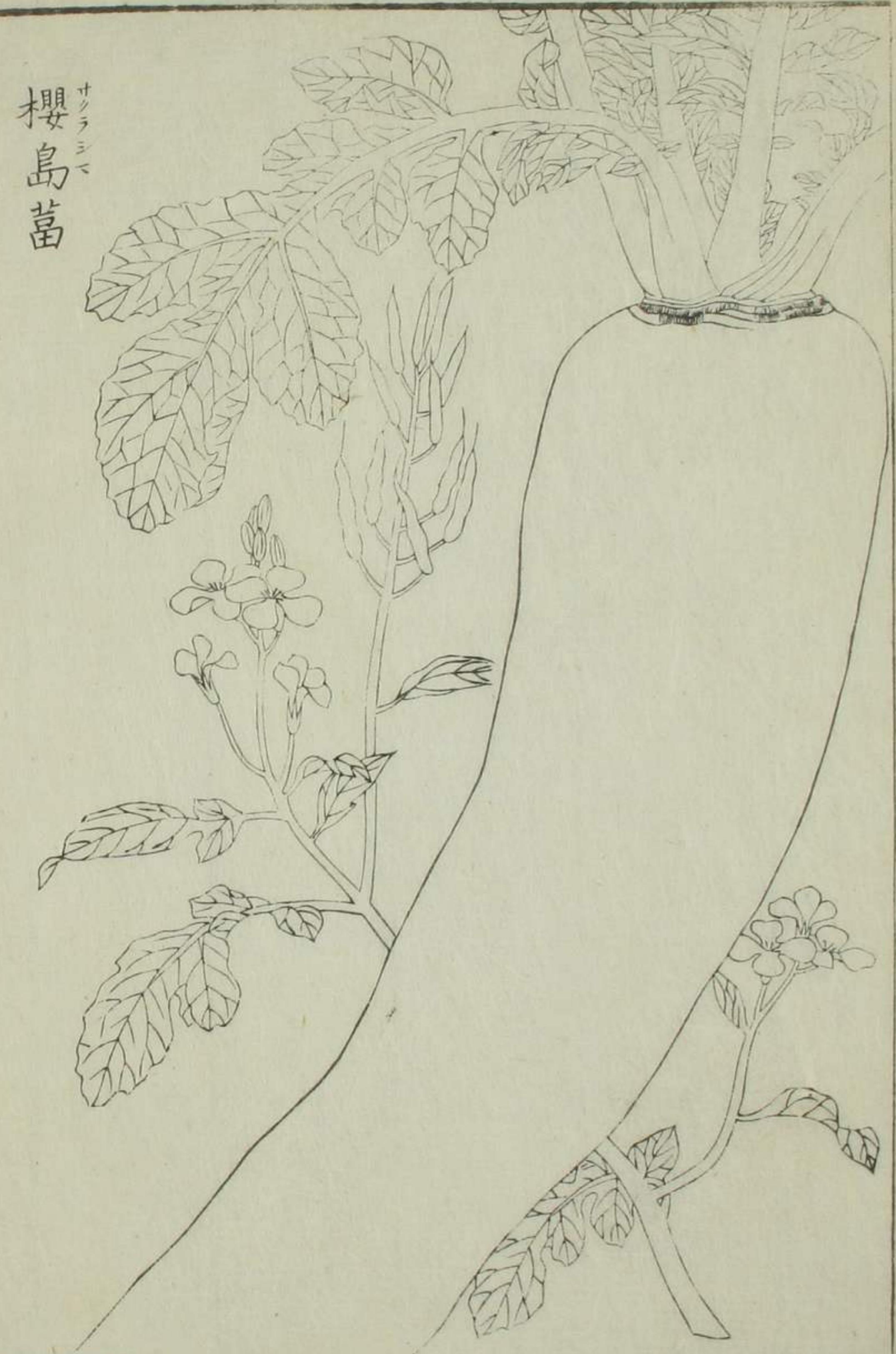
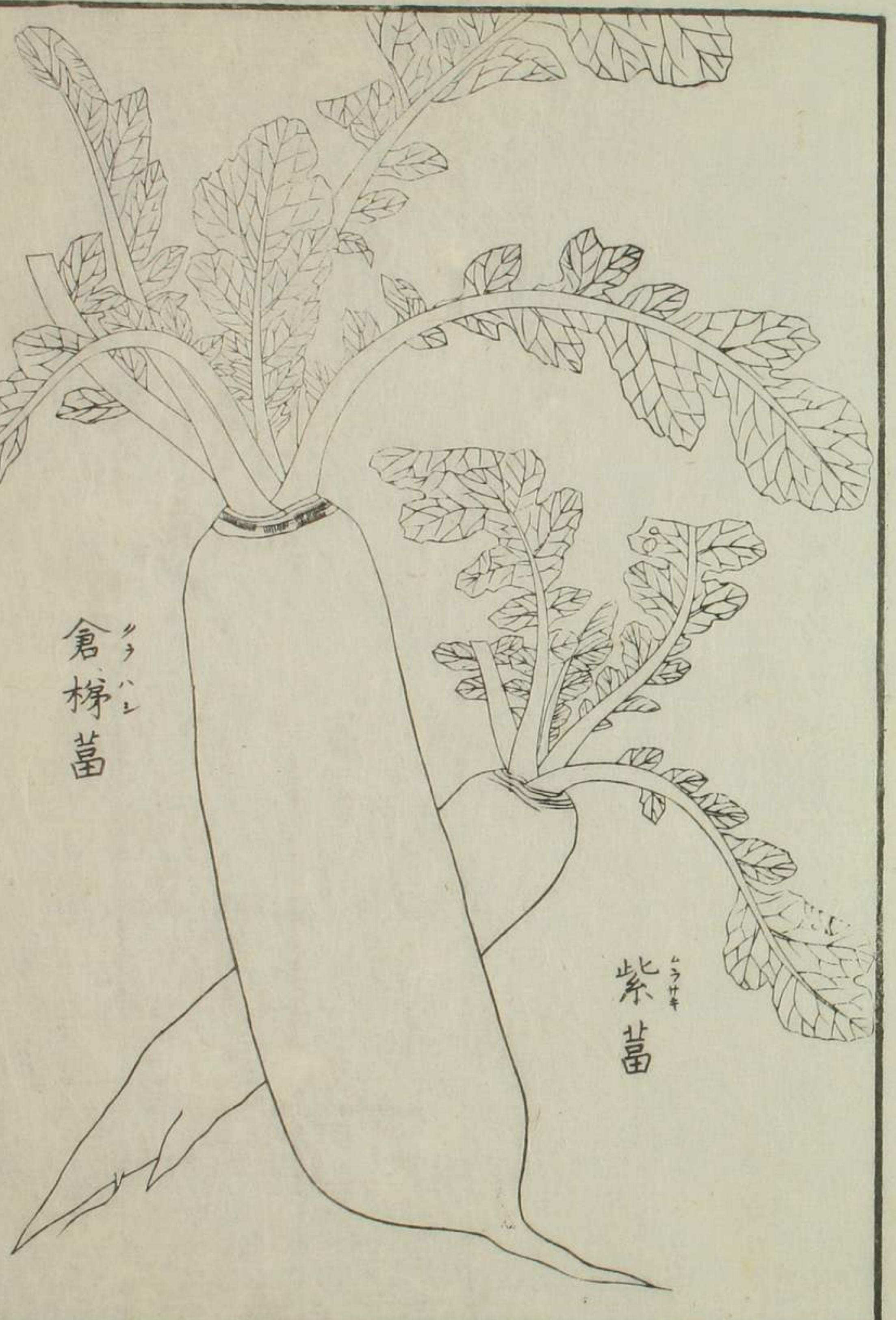
幹立し葉縛也小一て厚く嫩く白粉と粉しが如し和蘭
地方の葉色皆志う又一種和葉菜ゆり葉細尖莖又莖又
近く兩岐ゆき之を折せば向付出でされど菘類み非ど
○菘菁の頭莖を抽出て漸く老かじすると莖立どつみ
内膳式漬菜み載られぬ俗み小立とも莖立とも称へ
和名糾み豊と仰字書み豐莞ハ蕪精と云え又豊ハ菘
と通じたりわり万葉集に上毛中之種也のくくち折
えやし吾ハまことにあとし亞ビトキタ菜の類ハおほ
く二二月の次み莖立ちて莖花と咲可とが中早晚比種
各季乃名亦许多あり此花や艷陽の方盛に咲て春の跡

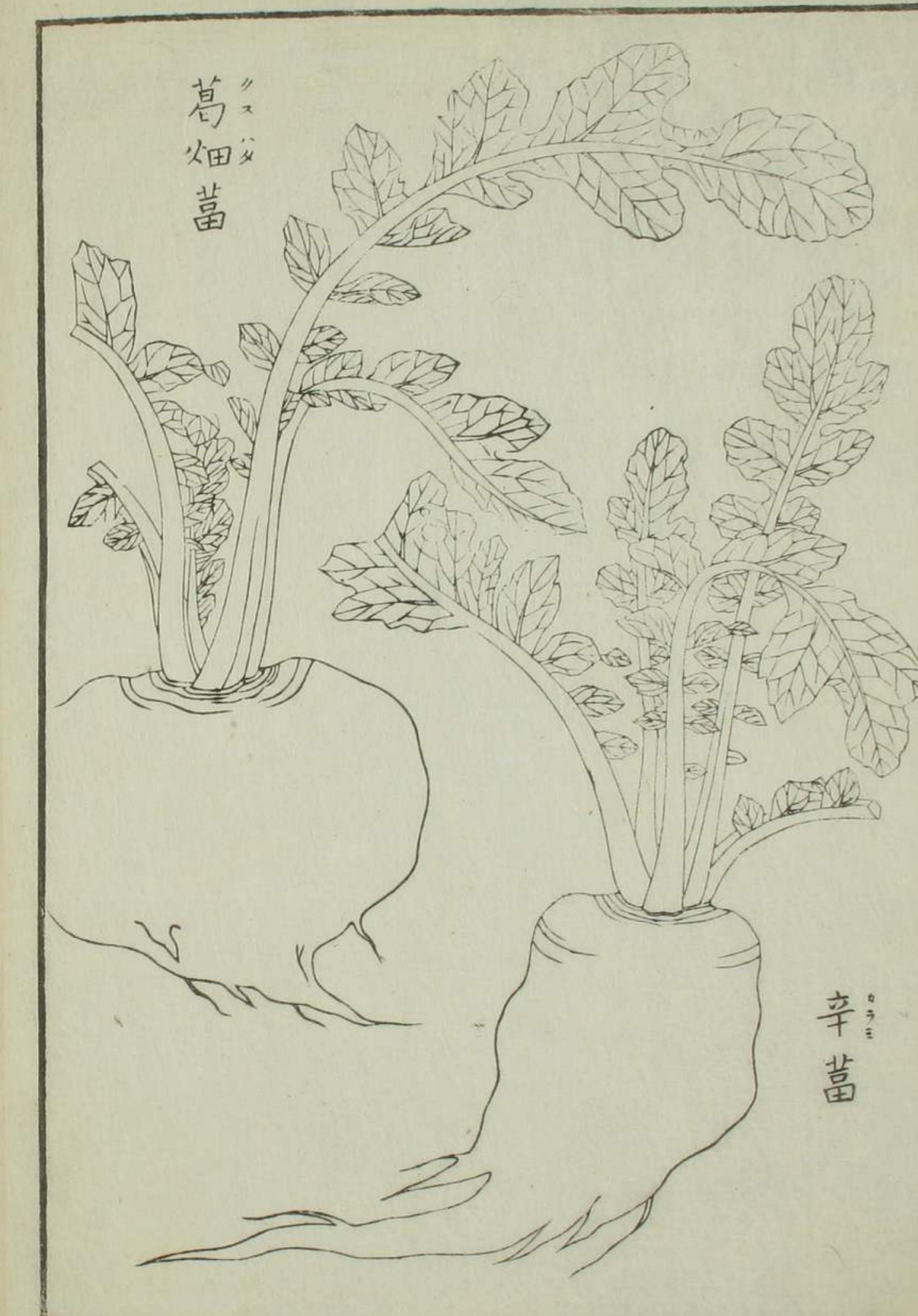
つらと残り園生ツヅクおもむきゆみあらへる胡蝶コバタケのをが
さあどハ莊周ヨウコが夢にうりれあん心やしてやらそく乃
のちうどふかくとまれ已アリ寝へる夢ユメへいとあまれふ
モ○菜を植るに月ツキに種下シダすれど四節ヨリシキみ施シスることの
し夏ナニワハあろーく害カミ蟲の呪ツブにあと引成ハシメルハ陰溼カクシヂのせとえ
らびてよし

氣味甘平ミツメイカンボウみて毒カムかし油オイルこすて頭カブを塗ツバクし巴ハナ繭ミツを長ロハシ
くぬクヌ○主治シラフ小兒赤遊病コノシハヤシ治ヒツクに上下シナフと巧ハラフき心ハラフ菘葉ハラフと擣ハラフ
てけべし即ハシマツ止ハシマツ又油オイルハ刀劍カツキみひあげ鑄ハサウエ模モ但足ハタシの痛ハラハラい
る人ヒトハ食シマツふと守カモフのれ○湯鍋ヨウケツ火傷ヤケケ又失火ハシマツみて園カヤの燒ハラフ

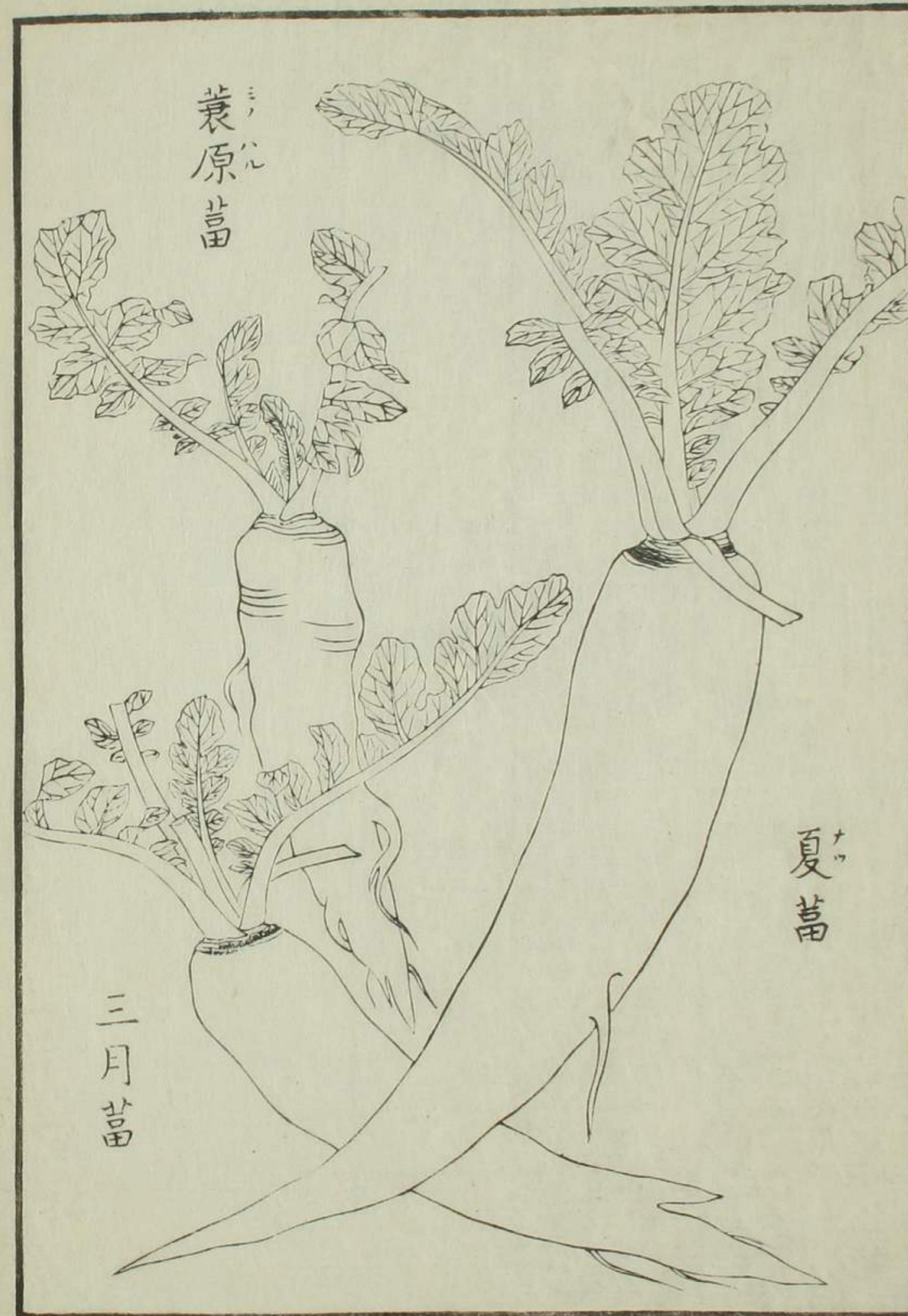


宮重菖ミヤシタハシ





於保禰古事記○
たる所比薺缸へ失て端をもつてゐハ生薺と
多く汁を滲べし方濟急
ふ薺で根元須根のものハ
細々の水く白。以和物大根
根の名六志上同孫名根根ニ二字、
し比み年呂 ふみかど徳しき哉
輩やい記と白。ざきく徳しき哉
とい根いあひ哉後バ名
須小引ふ根類くい哉後バ名
カ、大今志あ聚くさ果後バ名
志根婦呂の難み里しも順鈔
呂。蓋和ぬとあ要は語中今引
須公大名の句時元俗みの頃爾
と事根鈔向の尚永ハハてばハ雅
小根中○物謂向中ち太大と薺集
か源の和と根御考伊根字を注
る旁か訓いの幸ト吉の音お薺
を注さ葉へと称御ぬとぶに以和
いふも小る加ふ膳行道也と呼ぶ名
ハ菜の大ハベハ生薺約味ちと於
る薺秦根こしそ物うむはし株保
みと野ののれ七の字亦りて称
てひ太義根訓種中や蘿ひ(ふ文俗
小り根と白葉ふす 薺と薺字用
大須浪に向にて白 けてふ大



根
鏡中藏玉和歌集○散木集に苗固の鏡の折敷
景^{シカシ}を浮へゆる
古乃波奈奢^{ミタマハヤシタマ}二月この花は大根ノ花と云
菜菔^{ナス}唐本艸○韓保
溫菘^{ウツブ}以^ル上爾
名物方言農書云蘿蔔一
曰夏生秋曰蘿蔔冬曰土酥謂其潔白如酥也
上^ト見即
肆考○即
上^ト見
藩名ラディス

此^トのは^{シテ}よりと^{シテ}根莖^{ルイ}に用^スるやの^{シテ}小^シび國名
皆根^{シテ}て称^ス一^ニ仁德紀乃欣に継根^{シテ}山^{サカシ}持^フ女^ハ小鉢
と^{シテ}耕^スし大根^{シテ}根^{シテ}白^シか^シ荷^シあ^シ有^ス大根^{シテ}ハ根^{シテ}

いひ根^{シテ}いひ向^{シテ}いひ向^{シテ}皆古ノ言靈^{アシタク}ざり^シや
夫吾^ハ邦^ハ艸^ハ金石^{ヨリ}魚鹽^{シモテ}の利^ムむ^ルま^ド戻^スのく
か^{シテ}も^シぞれ^スの^{シテ}な^シど菜蔬^ハど^シ四季^{シキ}み^ズも^シ金
筈^ハ魏志^{シモ}倭國^ハ地溫^{シモ}和^{シモ}冬夏^{シモ}食^ス生菜^ハと^{シテ}金
樓子^ハ云始皇^ハ聞^ス鬼谷先生^ハ言^{ハシメ}因^シ遣^ス徐福^ハ入^ス海^{シモ}求^ス金菜玉蔬^ハ亦
之^{シテ}あり特^シ向^{シテ}大根^ハある^ス 皇國菜蔬^ハの第一^ハ
一^ニ西^{シモ}土^モ植^ス稀^シ小^シバ^ハ山人^斯土^モ來^スてハ必^シの
菜^ハ乞^フ求^スて賞^ス能^ク大^シふら^シ和^{シモ}蘭人^ハふ^シ日^シ鳴^シ陽
み在^スて翁父^ハの食^シ後^ハお^シ生^スの大根^ハ端^切か^シ毛^ヘ海^{シモ}に
嚼^スふし蓋^{シモ}大根^ハよく^シ鯛毒^{シモ}制^スと^{シテ}出^スお^シ乎^シ吾^ハ

人ハ多めタメ別て此のものはおもひりあらむぞと云り
あるタガ始日記ヒツシキに旅食所と在りしまちより切大根カツボの
るれざルレザどりとそぞりしてことをあやしむれがくとうとうと
しかりしどそりおとへ切大根の蔓モニ油オイリをとすをと
ふくおも新井氏曰そうして斯方カタみて常に見訓し者ハ
つばかりあり斯方カタみて常に見訓し者ハ
珍らしこも覺えど異の邦カタカタとおりいきてる
心ハとめてゆきしんむしめいばいと有がき事とい
た黄蘿イモロの悦峯エキボウれ焉に葉蘿イモロの事尋しよ斯國カタのびときよ
のハナハナしひとちうらどほくくえしゆハなし彼アサヒ而みて
ハ先ハシをと見て向ムカシの所し夏ハて紫大根シマザクラと云ふのくぬ
く赤アカとをみく指ハシの太ハラハラみて此カタと拂子ハラハラ柄ハラハラと出し

示されぬ味ハ辛く似シテるのみひま斯國カタの物カタと
くを純白味シロハラフミ甘ミと常て太長タケンもの味ミとせどと謂りし
やあ是本藩ハタケみて大隅様シマツノマサニ翁シロ根ハラハラ太の葉蘿イモロ僕ハラハラと
那ハナし沖シマツ建人シマツみ此カタのと示シマツして漢土シマツみて觀シマツや否シマツやと
仰シマツみはれには多くハ蕪根ハラハラとく遍根ハラハラの長ハラハラとば蔓
菁蘿イモロと云シマツ 皇國シマツのごと潔白シマツ也大なるのとひら
ぞかくハ美疏シマツの饅シマツ給シマツふるハ又すはらシマツと堂シマツじある拙
み群芳譜シマツ云水蘿シマツ當形白シマツ而細長根葉但淡脆無辛辣氣可
生シマツ食亦有大如臂シマツ長シマツ七八寸者則土地之異シマツと云シマツか
大根ハラハラハ斯方カタみハ取シマツみ足シマツうぬものや大和本州附錄シマツ薩

大あり心の素直ニ立のばる地上ニ根出でとをニ儀
茎までと草のみ拂ひりてゐるハ儀島大根のと云
らば大隅國今比方ニ延喜式營蘿菔一段種子三斗と云
廣きるを亦あう定め延喜式營蘿菔一段種子三斗と云
更凡うはのは預その圃と耕しておとしくその塊と碎
くこと細かにて早きものは六月より壠と起て糞壤す
熟て六月土用後七夕の前後あるハ八朔の頃より下種し
毛子を荏油芥油み浸て灰み雜馬通と乾し绵のびと碎
きホみしニ沙土をぬれへ其上より布覆ときハ猶雨等も
落と敗られど亦油氣みて蠹の害と避べし或ハ侵葉の
落と焼バ虫と殺じと云凡原野瘠土より生のハ小し
て辛く又赤膏地より植るるハ辛苦の氣味ぞ糞壤の熟

田み仰るハ左く一て柔軟葉と食て脆く味甘し唯尾
ハ稍苦辛をあき凡長あるみ隨て根頸地と抽引淡青
色ビ上出と呼ぶ地中みあるハ向しう根の上より見えら
るど掘入と云○此より諸道僅多し但尾端の實重み產
ハ豈大くて味甚強烈あり無歲み京師み輸るに匹馬の
脊僅二根と駄にとりや土人時と候ひ長をめぐらす割
て纖縫のよきと云乾て四方へ鬻り是は昔より
詰め亦此製ありて庭訓往來み纖蘿菔と名え里語みハ
せらのらんあんどものせら此揚花葉の類あり○山城
の吉田勝津の倉梯武彦乃傳馬中郎信濃の景山肥後比

菊池あ蘋乃吉暨伊勢の洞津肥前乃竹跡播磨乃津姫大
隅様島ふゞに培養^{ヤシナフ}ものの都て名產み係き足唯地道み因
是稍優劣ゆりといへど生ハ脆^{アヤカシ}熟ハ肥美なり松田よ
其夏のは辛く冬ハ甘し本との種類み固より夏より秋
うけて種子を下し老ふ根と引明滅春夏の交に茎と抽
て淡紫の花さく漢人大根を紫花菘と云ひ花と角と結
び糞蛆の形あせり子は菘の大なるがくく或ハ棱あり
赤水^{クス}珠み子と夢ト子と云本艸備要にト子と云蓋菔トと通用○三月大根筍大根あ
里江陰縣志み楊花蘿菔ハ蘆菔一種己は八九月み種と
細長味鬆脆といふもの是ふるを布三四月北交に實を結ぶその小あると江門みて細根

大根と云○夏大根わ^キ本艸吳瑞云夏月復種者名夏蘿菔己の種子の信
濃の景山駿河の清水^{ミズ}而出るものをし故ふ景山清み
と通ずれせり味み駿河風土記曰蘿菔入内膳司料と云
ふ春種の夏大根みてわめて奉貢み取玉^{ミツガ}ある
べし○蘿大根わ^キ一名辛大根味を辣し麌の具み宣し
或曰北征錄み沙蘿^{サラ}葡萄^{ブドウ}尾張より出るとの四時と貫て生ハ辣
く鶴ハ甘し信濃本を採ば但馬相模のやうりみて似
あり或曰近江諸^ブ山^ハのびうら生しみかみ
一名勝^ハ大根といつも形を身長尾よて風の名と更
里本薦日向の城郊^{シマツ}ふ薦原大根わり亦蘿大根み類て贅

の大小三四尾冬月掘採て塙^{シホ}或^シ夏生^{シテ}或^シ肉理潔^{キメニシタ}
黄^キく香味他^シ燒^シり此^シの蔓原^{シテ}ふせよ自生し或^シハ
移^シて麦田^{シテ}の中に漫撒^{シテ}セ^リみ能生茂^{シタ}又一種原野自
生^シハ根^シ最細^{イトホソ}て高^キみ至^シうど俗^シ天道大根^{シテ}と呼^ブリ綱
目載^シ諸葛菜蓋^{シテ}され候○守口大根^{シテ}を捺津營^{シテ}神祠^{シテ}の
前^{シテ}植^シし^シとのと^シ土人宮前大根^{シテ}と呼^ブヌ^シ河内^{シテ}も^シみ
卫長條^{シテ}みて脆^{シカク}し糟^{シラフ}み施^シて四方へ致^シに又一種津の池
田^{シテ}卫^{シテ}み似^シるものハ潔白^{シテ}の長條^{シテ}ぞれの土^{シテ}張^{シテ}柱^{シテ}
大根^{シテ}といひ京師^{シテ}みて中抜^{シテ}といひ江門^{シテ}て角^{シテ}枝^{シテ}といへ
已經^{モト}耳^{シテ}固聲^{シテ}あり凡^{シテ}京師^{シテ}の大根^{シテ}の直根^{シテ}がさハモ地石^{シテ}
故^{シテ}あ^シ精氣^{シテ}土^{シテ}出^シて喜^シ濃^{シテ}し

○秦^{シテ}大根^{シテ}あり秦^{シテ}ハ相模^{シテ}地名本自生^{シテ}なり^{シテ}の形
紫^{シテ}長條^{シテ}あり東方地方^{シテ}ハ特^{シテ}燒^{シテ}くやしき^{シテ}京師^{シテ}みて
長根浪薺^{シテ}みて細根^{シテ}あるもの是也^{シテ}といへ^{シテ}而^{シテ}蓋^{シテ}むりし小
大根^{シテ}と名^シしと^{シテ}此輩^{シテ}と東方^{シテ}みて作^シハ硬^{シテ}く浪薺^{シテ}
ハ脆^{シカク}くうぬ^{シテ}生^{シテ}ハ辛苦^{シテ}て食^シみ難^{シテ}也^{シテ}固^{シテ}今^{シテ}也^{シテ}浪薺^{シテ}とあれ
尾^{シテ}出^シは長條^{シテ}の乾^{シテ}大根^{シテ}といへ^{シテ}亦^{シテ}このれ^{シテ}かし
北征錄^{シテ}云沙蘿菔根^{シテ}長二尺許^{シテ}大者徑^{シテ}十下支^{シテ}生^{シテ}小者如筋
其^{シテ}色黃白氣味辛^{シテ}而微苦^{シテ}亦似蘿蔔^{シテ}是似^{シテ}而非^{シテ}ある^{シテ}黃白
穩當^{シテ}かうど○紫大根一名赤大根莖紫^{シテ}おで紫^{シテ}と常^{シテ}
肉^{シテ}の中^{シテ}も淡紫^{シテ}也^{シテ}カリ西州^{シテ}の俗^{シテ}迨節^{シテ}み鱈^{シテ}と^{シテ}轂^{シテ}卫^{シテ}圖
集成引歷城縣志^{シテ}云紅蘿菔形如瓶然亦有白者紅者味辛^{シテ}
又農圃六書^{シテ}み紅皮蘿蔔^{シテ}と見えし並^{シテ}み赤大根^{シテ}かるべし

月の漸冷^{コトヒキ}ニ露^{サラレ}天て日乾^{シタ}セシハ季頃味^{コトヒクミ}と失^ヘリ○淺蘿^{アラツヅ}
ハ大根^ハと洗淨水^{アフ}と乾^シさしめて塙^シと附^テ桶^{カチ}み底^シじ夏月
ヨ至りてハ食^スム事^ハ有^ヘリ○貯蘿^{タクツヅ}は或^ハ百^ハ桶^{カチ}有^ヘリ^テ此^ノ庵
ねあが^ハ出^シしぬる冬至^ノ前後土大根^ハと櫛^シと魂^{ソウ}みて繋^シざ
サ^ハ着湯^{コトヒ}に^ハほしモ宣^シと凡て塙^シ一斗^ハ新稻^{コトヒ}の糠^{コトヒ}と去
ふ三升^ハと入^テ之^ハと淹^シ固^シく桶^{カチ}と封^シて石^ハと壁^シみお^ハ常^ニの
火^ハとし^シあ^ハしく^シ火^ハと欲^シハ毎月^ノの度^ハと以^テ塙^シ一斗^ハ
と^シべし^シ喬^{カツチ}のハ色紅^{シロ}味^{コトヒク}愈^シ良^シ○寧樂蘿^{ナラツヅ}の法^ハあり
致富全書^ハ糟蘿^{カツヅ}と云^フり其他味^{コトヒク}蘿^ハ漬^シる^ハ成^シ曲^{カツ}
子^{カツ}曲^{カツ}物^ハど^ハづ^シ曲^{カツ}ハ^ハ婦女^ノの匂^{コトヒク}味^{コトヒク}と^シひ^シ

○錦^{シナ}大根^ハ一名紅^{エビ}大根^亦渴^ハ大根^{有^ハ}ハ遲^シ還^シ大根^{アリ}と
いづ^シ紫^ハ菘^{カブ}菜^ハ似^シて紅紫^ハ也^{四时}蕃^シ根^ハ剪^バう^チ
に紅^{シナ}頬^{カタ}文^{アリ}て鮮^シ美^シ伊勢尾^{シテ}みてやし^シア^ハ○童魚^{カニ}
大根^{アリ}一株^{アリ}數筋^{イハ}と細根^ハと分^シ出^シテ長尺^ハみれよ
ぶ童魚脚^ハみ仰^シる^{アリ}同^シより本^ハ相摸^{アシマ}より生^シぬ○
兩股^{ツタ}大根^ハ根^ハ齊^シく岐^シわ^ルなり日次紀事曰俗稱福來^ハ
十一月子日所供子祭^{シテ}饌^ミ每品加大豆^ハ又供^シ兩股大根^ハ○
大根^ハ葉^ハ乾^シすと乾^シ素^ハといふ根^ハとバキ^ハ中^シ筈^シ下^シみ然^シ
霜^シみ凝^シ志^メしと乾^シ大根鈎^シ大根^ハといふ綱目称乾蘿蔔^ハ為^シ
名^ハ仙人骨^ハ亦方士謬^シ名^ハ仙人骨^ハ忌陸奥南^{シテ}凍^シ大根^ハ製正^シ寒^シ
そしき称同^シからぞ^ハヤ

氣味生みてハ辛冷あり食て氣味計せ熟ハ甘温あり食
へバ氣味改ひ○性人血と消し故ふ常にめく生蘿蔔と
多食ふ人ハ聲變と向くに血虛の人むらく食ふ愈々ら
ばの経済をふりへど聲乃班向ふるハ生質みをゆく
うへ因體耳聴かるハ吾より先み咸うどへ取どて上
口利ぐも下口裏ぬ口情させをうしき瘡も皆人まのほ
うりの元氣をかし況や 大邦の種ハ四時日用み益ゆ
足能食済麁毒と制し熟きばいゝある患へも妨かし○
主治衄血ヨ蘿蔔生汁と鼻孔中み滴入て良○蘿蔔血舌血
ヨ亦生汁み塗と鹹き行入て微く薦し嚙てとよし○急

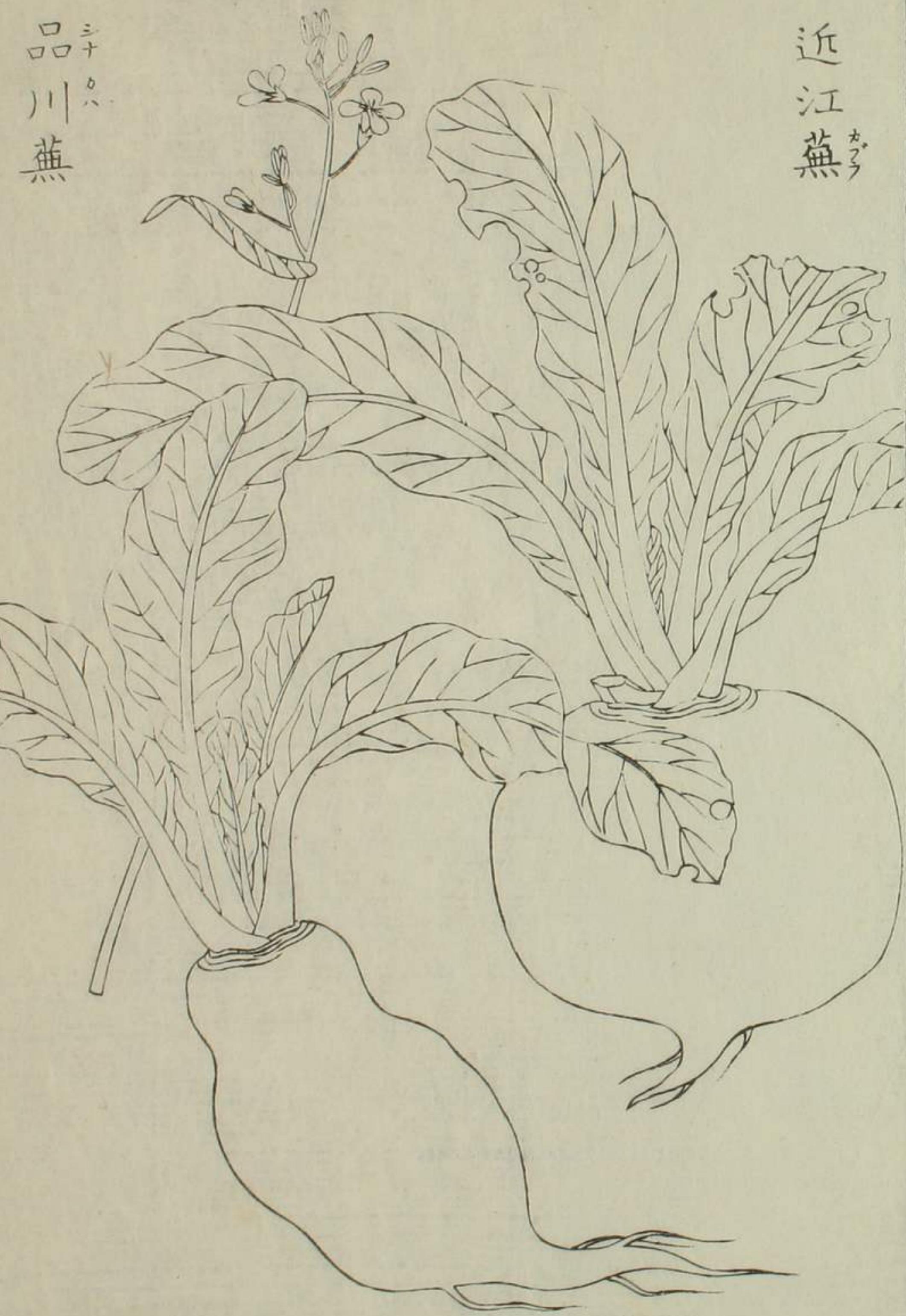
口痺卒みのんど
人辛み言健あら生汁と徐くと薦くして良○卒痺
をあせざる御身生汁み生薑の絞汁或は徐くと服なし
壽域神方み皂莢一挺とをして使ひ子と見て蘿蔔三本と切
水二盞と一盞みせんじ服ひをし三四坡ふをぞむ
ししくを秀乃^{アリ}○燒酒み碎て醒さるみ生汁と多く飲べし
酔船^{アリ}○濟急○蕎麦及湯^{アリ}饨とくらひ毒みゆり
了^{アリ}口ハ生汁或飲ひべし○螺公耳み入たるに生汁と
再^{アリ}お^{アリ}、げハ^{アリ}きら出^{アリ}○餐餳の咽み嘔て逡巡^{アリ}お^{アリ}
みも^{アリ}らんとするみ生汁と鼻中み灌てあし本朝○煙み
董て化と被ひみ生汁と連に咽みをあば更^{アリ}る又蘿蔔
一行と口中に銜ゐるときは煙氣人を毒むるかと能^{アリ}

或ハ新水み乾蘿蔔ば擂タマにて飲ヒふし醫林集要又云
居民逃避石室中賊以煙火薰之欲死迷悶中摸索得一束
蘿蔔嚼汁下咽而甦モリし松本相州後五百田某モリ医
ありに武の地ハ冬春必に火災多しとて萬人モリ火鞋一
足大根一本常ニ壁に燃えり是大根の汁能歎史の毒
と防ぐがゆゑあリ○同赤く狂躁キヨウゾウみ蘿蔔の生汁を用て
黃連甘草汁各半盞ハセ和白ヒツクて緑シロに煎し暴證モラシ○誤て銀粉
と飲む急カム生汁残飲ひべし病醫○豆腐の毒残癒モリ
ニ湯み越モリて飲む朱氏モリ胎癬タケツと洗ふ方モリ集驗モリ胎
癩モリ隨モリ瘻モリと大根モリ乾葉蓮蓬車前子各等湯酒みて解モリ
アマ蔓モリあり

どに薙モリし洗モリべし○湯火傷モリみは大根の蜜黃檗モリ粉モリ各
分研合附モリかモ○瘡モリとの卒に何モリても腫瘍モリに大根を擦モリ
しそけに小豆の粉モリと入附モリべし大根を子附モリは大根葉モリふ
了モリ研そのけと附モリて健○淋病モリみ大根の子附モリ向
陽みて已モリづく用み○烟草モリ子哽モリるに生大根の紐汁モリと
脰モリと脰モリべし以上和方○瞑眩膏モリ諸淋の瘀モリ痛モリて惡ふモリべ
りに效モリ大あモリ蘿蔔モリと大指のセイに切片モリてよる蜜二両に
浸モリせば時許モリおろて取出し後窓モリの上に立て漫火モリみて炮
可乾モリ乾ば又蜜と浸モリし又出モリし炮モリ二両の蜜モリに塗モリに
あらまモリでもめて炮モリあざりてハお速モリしく被モリこもれて

炮身乾せよ但集カサガはあとかうれ而一麾カサガみおこみて拌カサガ
 てゆ湯カサガひて船カサガあふ三般カサガの駕カサガわアリ○丹田カサガ各治
 の在上を穴カサガハの所集カサガは大あらひ矣カサガ丹田カサガセよ矣カサガ○伏留田カサガと光澤カサガ
 五里カサガと三月百カサガの指カサガ。○伏留田カサガハ騎カサガ下二寸カサガ有カサガ在上カサガ。○又伏留カサガの穴カサガ在上カサガ。○
 五指カサガと血牡カサガに壯躁カサガの○伏留田カサガ五留穴カサガハ騎カサガ下二寸カサガ有カサガ在上カサガ。○又伏留カサガの穴カサガ在上カサガ。○
 あ琳カサガ榮カサガ三卷カサガ比根カサガ五留穴カサガハ騎カサガ下二寸カサガ有カサガ在上カサガ。○又伏留カサガの穴カサガ在上カサガ。○
 ミハ蘿カサガ葡萄カサガ一升カサガと鉢子カサガみておこりて黄色カサガにかさくめ細
 ま一カサガて糖カサガとおして○丸山保カサガモ包カサガめて不退カサガニヒテスカサガ衝カサガテシ
 ハブリ飲カサガべし○以上萬カサガ○藥カサガに供カサガふるは辛辣カサガと取カサガる又生

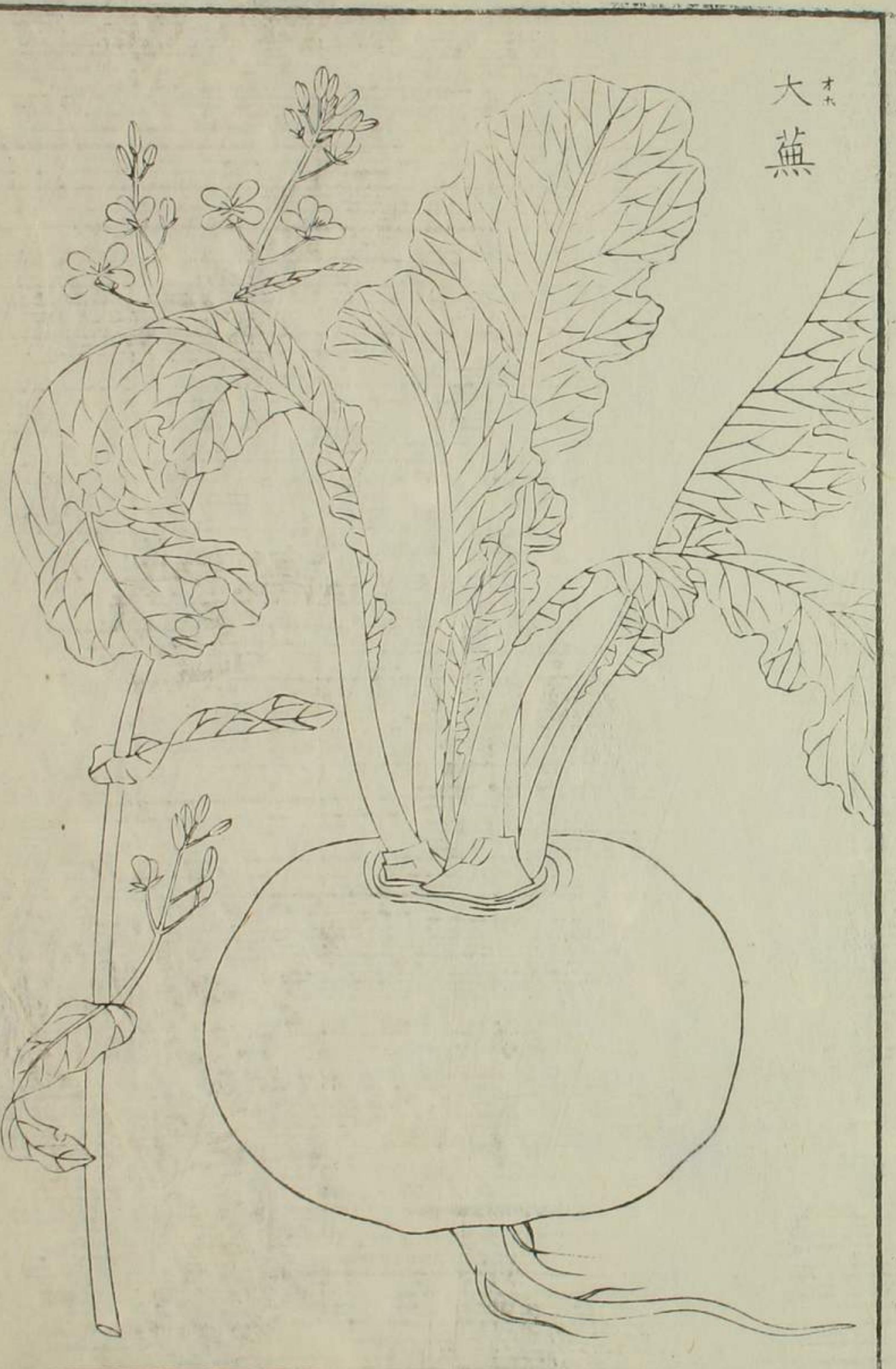
汗カサガと人膚カサガに塗カサガれバ失庵カサガものせ太温カサガの氣カサガ弱カサガと乃尚カサガ
 べし○辛菜菔カサガの生汗カサガを銀箔銀紙カサガ乃代カサガ上に拂カサガ毛先澤カサガ
 と糙油カサガらし鏽暈カサガを遮カサガて茶紙カサガの拂カサガし今画正カサガ四方カサガと用
 ふ水蔥蔥カサガハ然らぞカサガ○菜菔カサガの熟種カサガて十月より皆拔取
 金カサガし十一月冬至カサガとさしぬれバ根カサガ筋カサガうち或カサガハ蓄カサガみ
 み室カサガせあれ正凡カサガ菜菔カサガの類抜カサガて兩邊カサガがきまカサガ一莖カサガと切放
 て氣出カサガを没カサガ本處カサガべし。土頭カサガを放カサガしよ。ものは本灰カサガと壊カサガ
 大根カサガと仰カサガの薦カサガの薦カサガ可カサガはす。又作カサガ可カサガはす。大根カサガと大根カサガの薦カサガ好カサガいと
 はむらど凡カサガ根カサガの細葉カサガ芽カサガを擣カサガ去カサガべし。熟カサガ章カサガと葛根カサガ熱カサガ心作カサガる。百姓カサガの百姓カサガ乃葉カサガ花カサガ菜カサガ



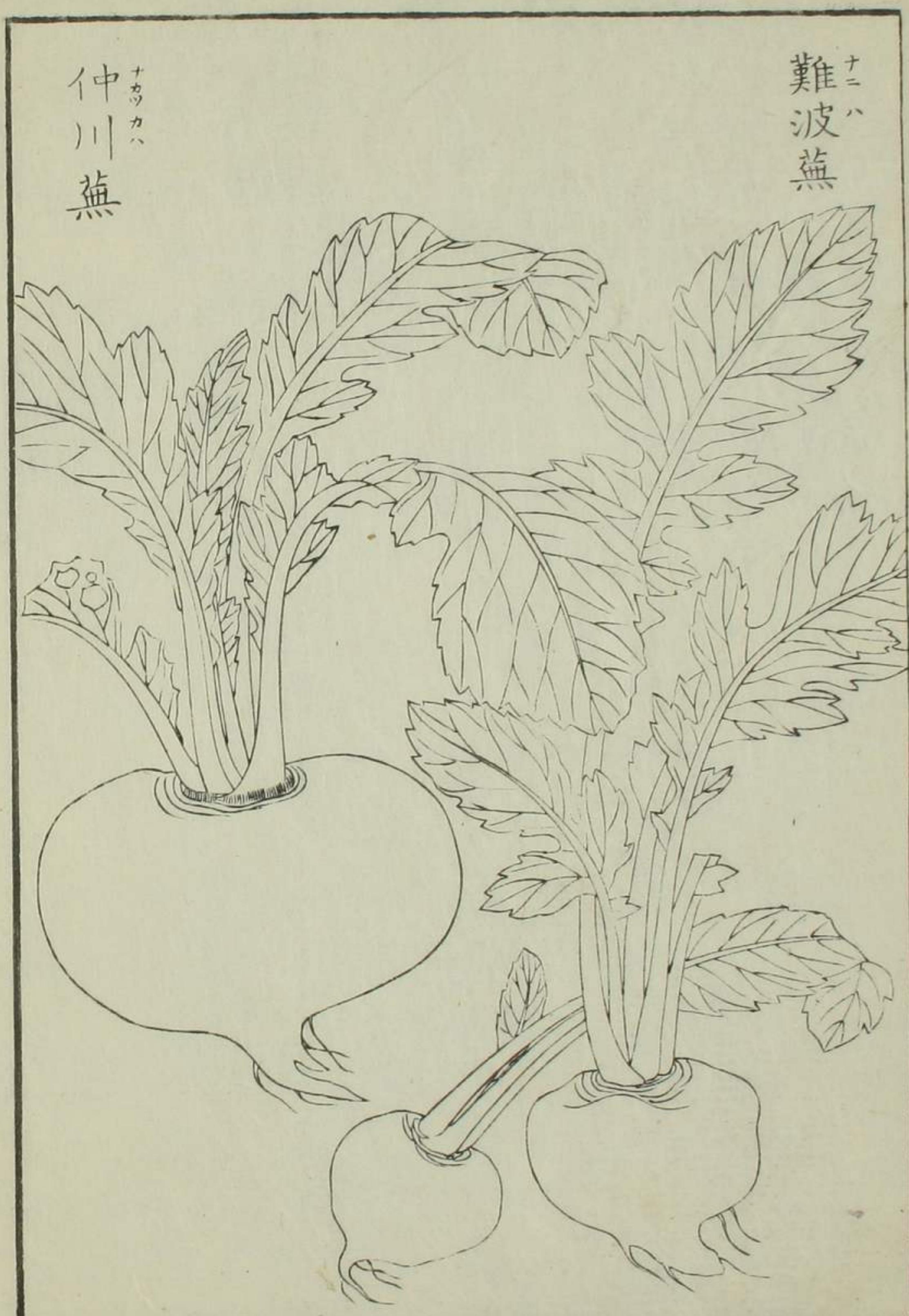
力口々

蓑耶ば對夫良書
とは交出莖也紀
加也一物下〇
夫是物か蔓體和
良奈と書此名
奈とて既とみ鈔
い既く篆姿加引
ふよ言篆と袁布毛
ちの根詩來
侍所と訓訓對
けりと訓訓對
て釋二其正米
菘へ又根又非
蕪る讀莖引無
ハゲ也を揚ス
一如の加氏下
みして布方體
せ又る良言注
俗小と蔓下
あふ仰仰書體
と蕪もと曰根

シテヨリ三人樂する花多形
りくさ者仕方り太はハの足
一ト人あはハ後小一株茎事
人識みれか一つ不卒てどみ
み度はばん接食持一花摘持
体使一智とみ用み様置持し
ん少後互のハみて中追菊
あかき方行立も大に立計
どるバ不素き立も大切一
ば人何才地者せらみ卒勢と
不ハセもみかぬ皆持立縮せ
本師のまで立縮せ
と長圓には一の事一ぬめ
とみ相を概のみ富也魯く
あハハ蕉若み持の根好多
る彼立みら我をけ申百のき
のしと取れ持縫てみ姓りと
壁がわ處方ベ能ハの美講
人説どつ人の事程と大せ庭
も事程と大せ庭
りとや早ほりみに寒根あり
心競りみて美能を得ハぬの凡とめ他ま數



大
蕪



仲
川
蕪

難
波
蕪

小蕪

紫長蕪



蕪アカタケ
根アキ 細目云蕪昔北人名蔓菁今并汾河朔間人食其
言類聚雜要供御中蕪要用る多く次アシアリ
京言八加夫良といひて加夫とのえ置アシアリ
蕪昔別錄醫
酥ス按
菜菔一名事地物
善急就篇通
雅作冥精
頭菜會纂
蕃名ラーブ

加夫ハ神武紀ニ頭槌カツツイと見え又古事記の加夫通久を頭
衝也と注ありけらハ加夫トハ其根乃頭也少く今古形
成ひひしらは薦アシタガタし今と不肯ふ頭と揃アシタガタト又加夫良と三
加夫良とひへ正又加夫良と三

言ひへるをハ古事記傳み鳴鑑と讀て加夫良といふ
ハ蕪根本鑑箭の根尔似る故ふ名く俗尔瘤乃蕪根よ
似るより名あしと云ハ非あと也鳴神夫理矢の神乃
三と署さ理夜ハ良と切り量みて加夫良て云義
えす或曰凡仲木の根株を加夫といふ子様の土の上
株と用とせるゆゑに加夫と名けし根瘤箭の根
の形之に似てそれで蕪様箭を絞て如夫ら箭と称へし
云ハ野猪の頭ふじと加夫此の仲秋の前後二百十日云々_云
明年春分み蕪生夏の末に花發是モ蕪ふと或ハ
假み修一根子代ふと蔬中の利用五穀互亞而故ニ
云仲秋内

持統紀ニ令天下勸殖蕪昔以助五穀と見えり禮月令
命有司趣民收斂務蓄菜多積聚注菜所以助穀之不足内
故蓋之為備詩邶風我有旨蓄亦以禦冬注蓄聚美菜
膳式營蔓昔一段種子八合總單功三十人半下今諸道
共ニ之を種ばる所かしこの種類をみると多く圓く長
く大小亦いとしかく又居蕪子持蕪晚手蕪子の名ふ
かり完美之は肥豐子て津瀆ふせみ名づけは
近江の產大尺回圓く直し又山城東山庭御庭耳東山蕪あり
律雖波ふども相同し江門水川のは年毎子官ふ上了
和子に俗子貢蕪と字べ足近江蕪根と同乾しきるハ醃
藏と云次牧蓄て四方へはやり式乃漬春菜料子蔓根須

須保利六石と普根須々保利一石とゆゑとお訓葉
二字鏡と引て菹字すぢり醜字モ、不正と訓きば須く
保利ハ漬物の名あるべしと考えより今近に浪算等す
て莧葉と接尾字鏡也と熟菜乾菜などいひ示茹ど
ふとハ酸莧と称ふは須く莧の酸るみや按ニ公事根源
往み葉菔と云ふに接ハモドカラモ大根と漬物又モルの傍源
ありの名あらべしはらばもくふろち道代乃義とぞお
はる○子ハ油菜子と云ひじく油と酸うばへし○按ニ
蕪の器大あるものハ伊豆のハ丈島より出るハ丈蕪ふ
更俗子大蕪と云ふハ丈島にてハこの茎を剥穿て釜内
おろくし飯と炊す蔓を煮あとゆりと親見しきの信生

邑豐明、一統志徳安府ニ謂根子菜根似蔓菁而大又似蘿蔔
他處皆無惟安陸為之といふの輩からじ孝藩大隅の中
仲津川み產る者ハ蕪也あり是食療本艸の九英菘云々
茎し又根圓く稍扁く截て金暈あると俗ニ天王寺蕪と
称ふ本津今宮等の地み產るもの大小二種あり乾て蔬
させらる白小て風味甚^シ也正字通み蓮花白と又
えり又根の圓て長と長蕪と云信濃等云々りと云ハ
正字通み箭竿白と云のを玉鑿姑蘿志云藏菜出群城
肥白而長名箭竿菜冬月醃藏以備藏故名是亦此間の長
蕪みて江戸の莧菜蘿と云の属あり又一統志陝西云

圓根似蘿蔔而圓青色とえハ蔓菁あると漢國の蕷ハ根
凡て長されふかくいつり但救荒本艸の野蔓菁と農政
全書の水蔓菁山蔓菁ハ未だ考得ど

根葉氣味甘苦溫無毒蘿蔔よりハ甜く苦し○燒耐に醉
て死せんと寸々蔓菁乃生汁と取口す沃ぐ愈し又大醉
宿醒ふ考へど病困との蔓菁に米少許を入煮て滓を去
此を飲あめて良_{時後方}○東聖寶鑑○無名腫毒に蔓菁根と搗て
塗少許を入ぬくて封べし○犬咬傷愈て復瘡癰了_ト
のに蔓菁の根汁と絞て良○薦根の中穿向_{カツカツ}蔓菁と納寒
水_{サシカス}曝乾し時み際にも蔓菁を虫取く眼痛と治すに俗云

是を蕷明礬といひて可侍て尤驗ありこの花と子ハ眼療
み用ひるひと本艸考み載といへども蕷明礬の法ハア元
ぞ○子氣味苦溫無毒也眼疾と治し又明少_シに煎し
頻_キみ破_クておし又花と乾_ト用ひておし○黃汁_イで
衣_{カツカツ}を潔_シ喰_ムまでも皆黃色みふるに子_サ未_シなし平旦
子_{ツイ}井華水_{ミヅ}みて日_ヒに破_クておし色黃みハ人卒_ハ爾_{カニ}渾身黃_シ
子_{ツイ}と搗_クて汁と取_ルりあはれて飲_ムじべし○諸葛菜ハ本
艸既_シ子蕷菁の一名とふせり高峻事物紀原云今所在有
菜野生類蔓菁葉厚多岐差_{ハシ}小子如蘿蔔復不光澤花四出
而色紫入謂之諸葛菜又朱輔山溪蠻叢話云猫猿猺地

方產馬王菜，味澀多刺，即諸葛菜也。今採者諸葛菜八綱曰：引嘉話錄云：諸葛亮所止，令兵士獨種蔓菁者，取其纔出甲可生啖一也。葉舒可煮食，二也。久居則隨以滋長，三也。棄不令惜，四也。回則易尋而採，五也。冬有根可食，六也。比諸蔬其利甚博。至今蜀人呼為諸葛菜。江陵亦然。又宋の范祖禹が唐鑑云：唐德宗建中中，朱泚叛，攻圍奉天城，中資糧俱尽。每俟賊休息，縋入於城外采蕪菁根而進之。德宗帝召卿相將史謂朕以不德，自陷危亡。公輩無罪，宜早降以救室家。羣臣皆頹首流涕，期盡死力。故將士雖困急而銳氣不衰。此この菜根亦人命之活ける黒牛也。故曰：師を他處へ出しま

在陣の傍に蔬をあらはば菘菜は第一也。四時に拘らざるば即生て絶らず。稼ぬべし夫治亂とくに衣食住の三者を急みて古の主將みば粟帛鹽豉の末といへども嗜向知て其辯用誠做主。是のふたまめの日ハ執政ビ有司のみを委て表裏の若お肉のよ酢に豆を身ハ葛麦穄へざる時ハ猪ハ有司主財と照管て廩庫虛耗に至り亦措所をちらざるよりその經生武人の書と譜せし兵と論じるみちを奉つくると省ざれば己の失を免せざるは健くふう也。臣國柱嘗て加藤清正胡鮮在陣の日を當す官かる下川あくへほ中のほ令出征の餉餉とて

知せし手書とてに至りて、其能書ありキ。中葉
種子と取集め五斗あり。一石ありとも急ば可。若誠と
の事あり。次々と前後の文までを写し載ぬ。モ文曰。熊行
國。無故若遣は。仍。後。大。友。元。上。此。お。黒。い。付。て。子。恩。坂
は。師。事。某。こ。へ。改。物。頼。は。代。史。彼。家。之。者。嘉。子。之。義。以
内。可。宿。者。い。以。下。數。條。ハ。大。友。家。勅。頼。り。人。を。肥。後。江
以。一。兵。糧。も。傷。み。千。石。壹。万。石。み。ら。う。じ。貨。船。る。向。ち。可。
越。た。う。ひ。此。方。ふ。不。入。ど。ち。公。残。の。佛。算。用。立。よ。ル。省。不
苦。山。旅。遙。ハ。バ。及。遠。恐。は。每。大。室。毛。二。千。石。可。
若。誠。の。事。一。味。噌。壹。斗。二。升。入。の。桶。二。百。毛。三。百。毛。こ。し。ら

へ。家。外。内。又。ち。隅。奉。高。原。河。風。河。茂。田。中。と。も。お。改。味。帰
有。次。第。ア。若。誠。お。味。帰。の。か。ち。り。ふ。ハ。大。室。と。マ。相。渡。い
う。れ。ど。越。の。て。ち。接。み。ハ。あ。ら。び。一。場。の。役。い。ミ。そ。一。ぞ
い。む。ニ。ざ。う。ぐ。い。も。入。事。い。皆。得。き。意。可。若。誠。の。事。一。ふ。ま
要。三。十。帖。レ。ど。ア。若。誠。ひ。う。一。茶。の。湯。の。ふ。ろ。か。廻。城。モ。て
有。之。ふ。若。誠。ひ。う。一。茶。又。名。作。具。呈。名。禮。座。一。去。年。より。來
い。つ。の。用。み。可。立。と。存。延。引。い。が。さ。う。の。限。み。て。不。若。誠。ひ。う
ぐ。の。傷。ハ。宣。前。若。誠。ひ。う。中。妻。の。皆。定。而。可。為。モ。か。一。去。年
茅。い。つ。も。の。ご。と。く。而。雖。前。不。存。い。が。か。の。考。セ。茅。ア。傳。取

じやねへせ一切をも重みて不お波室の年費自二千貫、
圓鏡等へ行るまじくいあいつやめごとく不傳ひて
代名を多めに可多く有る事もハ代友とてちひ
いて可出熱ヒ小物成し得不私納シテ有代官を此事はき
きもへひてて上以手一熱相石壁ヒツカクシ年未進仕おちひ
か里シタニ成はへばくろしきシキと相心シヤウジンに空班深シマツシマツ
い去年よりハ一切手未進裏ヒツシマツてもへも切に署シマツに上來し
今さへゆき空おゆはいりば後シメに武清上來とす海し
いても累二万石リツニワシロよけいそ事ハ有呂若狭の主を爲
作皆何事シタニ代友を無黨シモドクとお構シラムかとんほの法代友の前

算用の圓鏡キとあげてやうに幻圓鏡のおとく朱大至仰
ち以着法清光シタニひひいまさシマサ通以盛合鑿穿シマツシマツて不
作哉シタニ、第引有し有シタニ心ねむシタニ一へりみちお
きくれシタニぬ桶シタニさシタニすシタニ二シタニ三シタニ四シタニ五シタニ六シタニ七シタニ八シタニ九シタニ十シタニ十一シタニ十二シタニ十三シタニ十四シタニ十五シタニ十六シタニ十七シタニ十八シタニ十九シタニ二十シタニ二十一シタニ二十二シタニ二十三シタニ二十四シタニ二十五シタニ二十六シタニ二十七シタニ二十八シタニ二十九シタニ三十シタニ人前で差戦シタニ事一
京郊市右兵シタニ廿シタニ三十人前で差戦シタニ事一
三双シタニあつらへみ出シタニ不令の大きがいシタニ實シタニにても急
て下波シタニやあごやへ在させ此方へて差戦シタニ事一場シタニへ

妻の後砲を保出で次第の方へと差越玉葉を事に出で
次第急て差越の事一後砲をかしむ者みてよ釐度の方
の者成せみ百千人こおりどお拘で差越つるのま公人
もふ二千こよりど成ひ差越抱可差越の事一後砲を保
やぶきにて赤津ア安川崎には志虎越へ差越用意で在
之の事一城焼残りを多く差越不自由いがりらひい
ゆねすれいりやうも不自由ゆく様に丈丈にて付以
がへ不旬セ放りづらひ残りをせし様にゆくあんて
爲^{セト}言ひよ一大反応耳^{アリ}者ふくろき付小屋^{シテ}うけとす
住^{スル}本行ともさらせ小屋^{シテ}心あはい被

こへヤ付の事一候後の勧^{アド}を蒙下の舟行時り急可當
済の事一前前^{アラハ}めゆ付舟を何程も量體取流くらせ
アレ此化は舟少みじりくの皆あがてとやで仰ひや
うこアレ付舟一のびり具足毎のびりさしり、のびり
さかみ十本成せ百本成大^ア差越の事一舟表へ差信^シ
人と多^ア載り重てハ船滿^ア居者處^ア付一ヶ用^ア
二度づ、とだえあく差越以復^ア可^ア定城^アを用所^ア
あ申^ア今^ア用をみ俄^ア急用以下^アそれく^ア番^アりと仕て
差越別^ア通事^ア處^アがりの性一差越用^アさせ^ア治^ア立^ア
の^ア可^ア為^ア曲事^アの貨船^ア向^アもこし^アへバひづみ百^ア

貰ひて唐南室まである少しの後といふと高信不^通
之解ゆ法も泥ゆる一らにそくまうちやうちゃんらにそ
くと一夜くみて往とかしゆのとナ丁計て多^シ油
も二斗入と二三十樽で若城よりかく等^シよくごい環
舟、有次第四方へ可^シ城跡ニハ奈都へキを十^カ十
みもこしらへて自^由放^け候^ク少^シ城あと^シ城作事^{メテ}有
之は皆不事^シ候^ク兼てこしらへて室^ノ事^メ上^サル^シ
余^ノ通^行時^カ差^急お納^メ城當津有^シか^セ門事^メ有
之は方々不^シきひだ哉^シふき物^ハて多^シ哉去年
之ち^シひ高年^ハ差^許をあ事^メ不^自由^シひるわ^シと^モ

か^セヤ^シ不^テ有^レ油^シム月^ノ日^ノ自^由津^シ加^シ若^舟ち^出の
とのへ下川又た余^ノとのへ^ノ付^シえ書^の省^ニ以上^シ
入^シ書^シ高^シ極^シ行^シ兵^次ヤ^キシ古^ト得^シ意^シ又^シ荷
物^積ひ^シこ^シ時^一艘^クい^シやうの物^とつ^シと^さ
しきと^シは^シ哉^シ去^シ年^ハ足^シ年^ニ積^シシ^シ用^シ同^源は^シ
て^シい^シそ^シ可^シ哉^シ方^シて^シお^シの^シあ^テお^シ改^シ中^シ
地^シ有^シうぢみ人^シ大工^サ人大^工十丁^クろ^グ五^百疋
目^成舟^千石^自成^シお^シ太^公魚^目て^シ哉^シ是^シ因^モ本^トい
づ^シこ^シも^うた^セい^シご^とく一人^シ刀^ニ百^二こ^しづ^シ
う^シせ^モ方^シあ^メさ^やさ^セて^シ哉^シ向^シよ^シや^シそ^シ

一め取仕の一人こしやべくいいつまで徳職人
善哉いハド道具以下丈丈持來いやうこ下付此方
居い職人を召をあくいてやくこくぞいうるしニ三
度用いどお網いて善哉此方こそもうよしの一大わし
くやくよだりひふまうるしとこしやべくい以上の
体に肥後か八郎宇新附新主の臣庶さればかくもやう
しみや用て捕み馭戎慨言征韓の事と論ひ中に大間
内侍心はつひり明の國をと服従せんとおがしる成
小西行長をわいくひそぬ境より年月を重ねてくるし
ま軍に當まぬ豈ば玉無しくていふでとくゆうじやど

思ふ心深きにそしてほるまじきわやまちは引出しけ
るさうと始より御を嘗める心のきゆまげりとげ加布
主計政清正ぬしみてひるざるに明の國領てお平らを
をハゆうじと嘗く思ひはてのあぎらハしうり
のちもぐ和睦のうちとと更に譲あはせたる。皇國の
あみもいとく忠誠あもしは此めしにあんまりか
ゆるれば行長かたへの人こみハそむと憎まれ
て不和ば正しかども胡鮮明の人をせんとばはみ
えどみ物みおもひて平壤錄みを清正才能勝行長數倍
かどいぞいフリソセモリ伐大間胡鮮と謀アモイシ
成形圖說卷之二十一

成

形圖說卷之二十一終
へ清らか鮮君機宋厲明之頗物絶れ戎其
正敵己の克所太之人清忍既色而慨間
其下と一已縁宗暴震正亦亡置わ言彼
人勇みは正美復寔射而駿曰一朝之
み一求勇し人禮不殺其去此快鮮陣人淺此
時あてと之得太至未亡事又後の端
み禍り人殺德己祖亡知國或可人文い
冠夫を其也美國孰之曰移皆とと而
吾大正慘痛至人者為妖此禍以侵正
の辯 臣乞刺號于西真猶女我為し
亦童邦は况乎仁花施說欲乃國必
従とみ君や似誠宗下之又得朝耶以
てい稼心哉無聽其力曰之鮮遂獻加詳
如へそ之坤愧諫事寔夫乎王殺之藤
ぬど至那みど也即雖多差縛之之殿清れ
べ色うと際い夫日過色非女愛軍下正ば
し称號捨てへ清出甚之暗樹妾前問在復
故道も正愛亦溺弱枝明使清朝言ぢ
みもとも天姬開人君槍人衆正鮮ざ
附てハの聖往資則國可亦刺為禱清獲
て今忠あるを將剛真之畏非以來之正一せば
言ひ乍り愈の波是始哉有殺詣此曰宮み此
卫裏の媚か法胡明萬石幽之返雖女近馭

